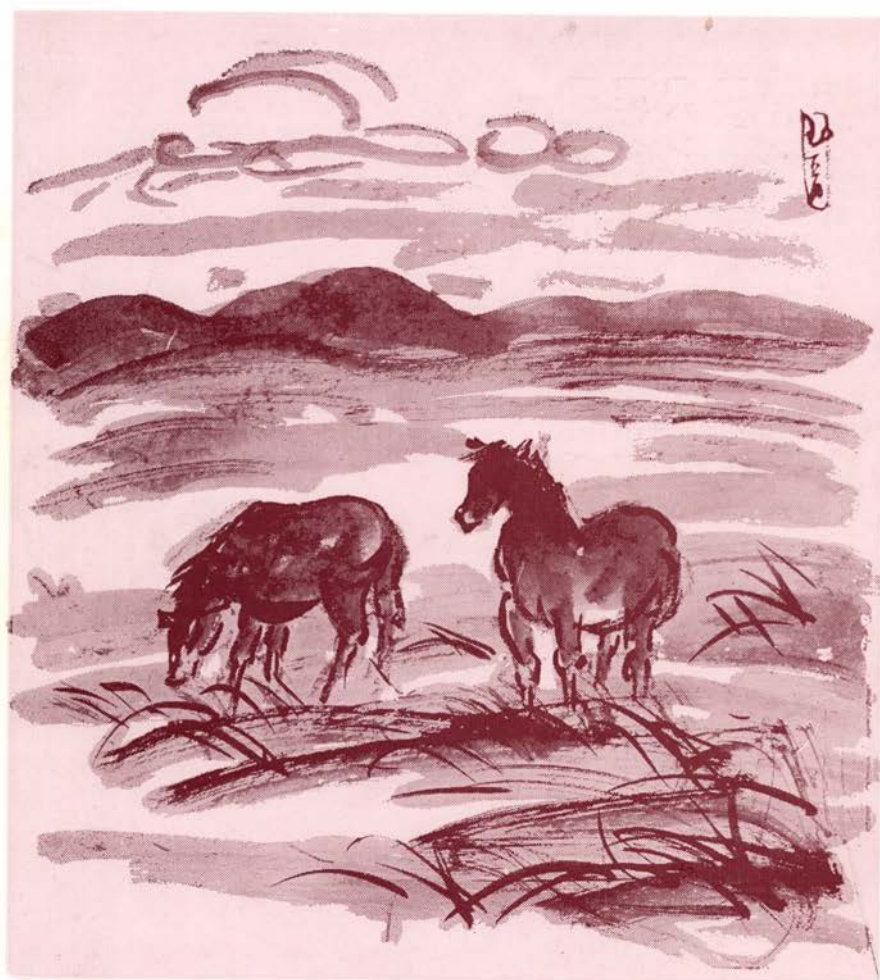


川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
 昭和四十六年九月二十五日 印刷
 昭和四十六年十月一日発行（毎月一日発行）
 創刊大正十三年 通卷五三三号



No. 533

46年度二賞発表

十月号

川柳塔社主催
46年度・二賞発表句会

兼題

柳話 中島生々庵
「王座」 尼緑之助選
「寄せ書き」 西尾榮選
「ハンドル」 若本多志選
「表情」 北川春巢選

会費 300円

(三句以内厳守)

(席題二題の予定)

★投句だけの方は郵券五十円封入

会場 御堂会館 (東区北久太郎町四一六八)

電話 251・5820番

(地下鉄一号線本町駅南出口から南へ二百メートル)

明日のくらしの
コンサルタント



アベノ店



上本町店



アベノ店621・1231・上本町店779・1231

路郎賞・川柳塔賞発表と同人総会ノ

昭和四十六年十月三日(日)開催ノ

★同人総会は午後3時から一・二賞発表句会は五時半から一

会場 御堂会館 (南御堂・文化教室)

★11月の兼題「正論」「ボラー」「無芸」「横文字」

★同人総会の案内状は出しませんが、出席者によって議題を採決させていただきます。

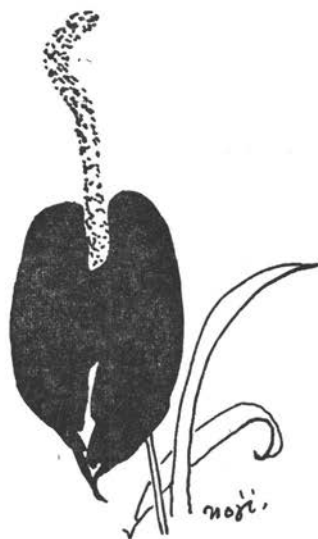
誠意と技術で
世界のために

SHARP

シャープ株式会社

俺の過去を借景に凹面鏡曇る
神の鞭禁煙に賭けるニヒルの瞳
遠吠えの男の屑の消えるところ
灯に群れる羽虫いのちを派手に着る
負けてたまるか孤独にもある演技

中島生々庵



いのち尊し

大学を出てから45年余にもなるので同期生の生き残りが漸次減ってゆくのは致し方ない事であるが、晩に残る遺影は60人にも達してしまった。去る8月8日有志だけ集って暫らく途絶えていた物故者の慰霊祭を催した。勿論功成り名遂げて静かに家族から永別して行った仁もあるにはあるが、在学途中又は卒業後間もなく病魔に仆れたり、関東大震災、戦死、原爆等々青春をもぎとるように連れ去られた幾多の痛恨限らない思い出が香煙ゆれる霊前の私達の脳裡を駆けめぐるのであった。

「命長ければ恥多し。長くとも四十にならぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ」と兼好は言ったが、将に冷水を浴びせられる心地がせぬでもない。然し同じ兼好の言葉の「人死を憎まば生を愛すべし。存命の喜び日々に樂しまざらんや」の方が実感的である。一人の人間として今日まで生かして頂いた感謝をじっくり味わうべきである。日々に樂しまざらんやとは余生一瞬一瞬の感謝と理解したい。「余命十年三千六百五十日」という私の旧作が蘇る。

川柳塔十月号目次

いのち尊し

川柳塔……(同人作品)

作句は休むな

川傍柳初篇研究……(九十九)

前田喜代人・故岡崎重義・清川端柳風・故高須唾三味・丸

博美・藤井和雄
十府・岡田甫

「旅人」以後の麻生路郎作品……(12)

近作柳樽

バクチ太平記

秀句鑑賞

……(同人吟)
……(近作柳樽)

路郎賞・川柳塔賞発表

近詠

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思い

(路郎)

私の句

猫でさえ三日も恩を覚えてる

隠岐不酔

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

中島生々庵……(1)

中島生々庵選……(4)

田垣方大……(2)

……(20)

傍島静馬……(22)

川村好郎選
若本多久志選……(32)

東野大八……(30)

西尾榮……(46)

菊沢小松園……(47)

……(23)

……(45)

作句は休むな

田垣方大

今年も作句の好機といわれる爽涼の季節になった。然し川柳は何も秋だけの産物ではない、暑さにうだる夏も、手のかじかむ冬も、作句の季節ならざるはないと思うが、やはり環境的に不快指数ゼロの方が詩情が湧くものである。さてその作句のことであるが、私は昭和二十四年山陽新聞の夕刊が、川柳欄を設けた時に初めて投句して、その入選作の発表には毎日夕刊が配達されるのが待遠しく、丁度蒔いた種が芽を出すであらう時の期待と、同じ気持で胸をおどらせたものである。ところが数カ月目は目を皿のようにしても私の名前を見出すことができなかったで、いささかむくれていたある日、あったじやありませんか。

有名な句碑もアベック気がつかず

とその時のうれしさ、三十八才の私がかかるで子供のようであったと、今でも妻にひやかされるのである、それから数カ月後今度は、「ハンカチの匂いわが娘がまてくる」が三席に入選、もういけません、これですっかり病みつき、完全な川柳党になってしま

川柳五十三次：(十三)

ハイウエー

太希志さんを悼む

柳々会小浜紀行

4誌の創刊号

川柳人とユーモア

雅号ぶっちゃけばなし

初歩教室

大萬川柳「差別」

川柳家の暦……(十月生まれの人)……遺稿

柳界展望

本社九月句会

各地柳壇

一路集「奇術」「黙否権」「ビジョン」

編集後記

富士野鞍馬……(44)

高鷲亜鈍……(55)

山川阿茶……(64)

中島小石……(64)

西尾葵……(41)

不二田一三夫……(48)

中川晃男……(49)

岸南柳……(61)

本田恵二朗……(58)

中島生々庵選……(60)

清水白柳……(54)

……(薫風)……(62)

……(庸佑)……(65)

……(文秋)……(68)

村田瓢太選……(56)

小林孤呂二選……(56)

森田茗人選……(57)

……(二夫・葉子)……(73)

座右の句

子猫ぞろぞろみな宿命の顔かたち

(生々庵)

私の句

幕切れに涙のままで手をたたく

福井 野迷路

ったのである。それからは職場の同好者を勧誘して、川柳雑誌社岡山支部水島グループを結成、作句に邁進していったのである。以来スランプだ好調なくり返しながら、また短い期間小休止もあったが、四十一年まではどうにか作句活動を続けてきたが、四十一年秋境遇の激変でぱったり作句をやめてしまったのである。その時私は非常に甘い考えをもったのである。即ち、「ここまで勉強したのだからしばらく休んでもすぐ元どおりになるだろう」とこれが大きな間違いであったことに気付いたのは最近である。

さて仕事もだいふ聊れてきた、健康も回復した、ぼつぼつ好きな川柳をと、筆をとった時、四十一年秋の時点より遙かに後退して、二十四年の初心の頃と全く同じ水準であることに愕然としたのである。即ち何をどう表現しようかという題材がうかんてこない。素材の組み合わせがうまくゆかない、作れば説明句ばかりである。等々、苦しみに苦しんでいる。五年間のブランクは二十余年のブランクと同様であることに気付いて、大あわてにあわてているのである、これにこりて今後は入選、没に、一喜一憂することなく、コンスタントに「牛歩の遅々たるもよく千里を行く」の諺の如く、絶えざる作句活動が「命ある句」への最短距離であると思う。



中島生々庵選

倉敷市 水粉千翁

手をつなぐ広さへラッパなどはない

膝を組み給え緒口掴もうよ

損得になり見失うものばかり

朝顔の咲かねばならぬ色でなし

真心を分ける両手がぎこちない

倉敷市 田垣方大

老婆と話題の切れた日曜日

六十五まだまだ手相見てもらい

何ねだるつもりか社長さん社長さん

電工は武装解除をして帰宅

花瓶にも好きな花あり秋の部屋

高槻市 福田丁路

マンションが田圃の中で仁王立ち

入院と聞いて見舞えば犬だった

折れて曲る程儲かる口車

ペンだこの固さに思うこと多し

かりそめに息する人の渦が巻き

大阪市 河野君子

クラス会の句(一句)

たけなわになればざあますひっかかり

覚悟して来いとは大阪の暑さ

若う見せるための毛染が赤すぎる

最大の猛獣人間かも知れず

青すだれ零残して雷雨去り

大阪市 大坂形水

押し釦何処へ付けよか非常ベル

妙なのが居ると隣から電話

ふと家へ電話してみる胸騒ぎ
われわれに關係はないドル・ショック
ハンディの上るカードを出せとせず

尼崎市 高津徹也

階段を上りかけては躊躇する
瞬間と瞬間にある余生

念の入る髪へ櫛やるいい話

高らかに馬いなないて名馬なり

湖の色に絵具の躊躇なし

下関市 国弘半休門

ロソクの灯で坊さん経が読め

神域を化粧仕直す寄付でもめ

鉄筆を使い古して榮転し

ヒモ付のヒモはヒモだが親のヒモ

性別に困る青春潤歩する

倉敷市 小野克枝

間をおいて正直だった子をほめる

野次馬の一人になっていた弱さ

憎みつつ追わねばならぬ影があり

精一ぱい燃えてカンナは秋を恋う

一年目あの日あの時だけの空

倉敷市 本田恵二朗

六十路坂越して名を捨て欲を捨て

露坐仏のなるほど晶子の言う通り
驚いたり驚ろかせたり閑と閑
前向きの姿勢が或る日進み過ぎ
泣きどころつかまれている負けておく

松原市 谷垣史好

雷へまさか金歯ははずされず

マンネリを断たん木刀素振りする

あたら美人が眉根を寄せる癖

終電の誰かに搦みたい気分

朝顔が咲いてるうちのひと仕事

出雲市 尼緑之助

ヘルメットきちんと並べ斗争中

遊びたい盛りへべからず集の夏

華やかに倒産をしたスパー

山菜がうまいうまいというも旅

さてね酒となつて気づいた誕生日

神戸市 仲どんたく

宿浴衣子連れ妻連れ酔い切れず

恩給がつくまで病軀に鞭を打ち

祖父建てし数寄屋へベッドでんと据え

受話機手に逝きぬエコノミックアニマル

紅がらへ霞簾垂らして京無音

大阪市 正木水客

風邪の熱大の字に寝て手が重し

下駄穿いて歩けば舗道石があり
釣ってきた鮎を夜中に届けられ
物干をぬらして夕立去に仕度
杉丸太の匂いが小径また寒ぐ

青森市

工藤甲吉

GNP二位デパートで虫を売り

帯に短く褌に長い退職金

ケンカしながらも並べて夜の床

女房の遠心力に助けられ

宇宙遊泳のように赤ん坊はい回り

兵庫県

遠山可住

麻雀を使えと先輩の秘訣

死ぬ順に相鎚うって叱られる

居眠りを前に滔々世を論じ

ガンセンターの通知それからの無口

友の栄転に

肩書へゆったりと酌む酒となり

豊中市

戸田古方

おもろい顔おもう描いて相済まず

プールの朝TAILの色までまつさおな

アパートに囲まれた田のいじらしく

死んだ川でも芦が青く伸び

謝ったぐらいですむことですかいな

高槻市

若柳潮花

鉢巻もご旅所までの祭り船

家元の紋で汗拭く舞台裏

遠花火夫婦が窓に腰をかけ

母の死を悼む

誰が呼ぶのかほほ笑みを見せて逝き

極楽が見えたか細い手を合わせ

名古屋市

吉田水車

路郎師七回忌に(一旬)

いくたびの不参を詫びる心われ

人間共二十日ネズミを笑えない

雑巾ならとおにすり切れ候えども

脱ぐなら脱ぐ着るなら着るで夏の服

悼 桜川不水氏

いくたびか訃報たしかむ蟬しぐれ

姫路市

村上春巳

言い遺すなにひとつ無く父は逝き

葬列を行くには派手な自家用車

生前の父を8ミリ歩かせる

焼き飯で二日をつなぐ妻の留守

ハンドルを信じて妻は舟を漕ぎ

島根県

小砂白汀

樋の尻つたう雲にも序列

保護色で味方うしなう羽目になり

世の中がどう変ろうと和紙をすき

かかる時伏せ字となつて身をかわし

手のうちを打ちあけてから仲たがい

岡山県 浜田久米雄

ちっほけな色気少女にしながら

サンプルのような女に物足らず

朝めしはたべて交通事故で死に

ヒロシマの夏 草も木もよく繁り

塔の影時刻を示すように過ぎ

高槻市 傍島静馬

路地中の善意集めて地藏盆

隠居部屋ママの隙見て孫が来る

髪洗う男の線は絵にならず

カブト虫強いヤツから売れていき

公害の街とも知らず迷い蟬

大阪市 宮尾あいき

悪童へ朝顔目立たぬ色で咲き

風鈴の機嫌取つてる扇風機

お盆でもゴキブリ赦免の余地がなし

おそなえが欲しさに孫は手を合わせ

お見合の大事な顔を蚊にさされ

熱帯魚夏を涼しい顔で居る

ＬＬのバーゲン妻に來た葉書

妻の勘当つて財布捜し出し

ハイミスの孤独おしやれでまぎらわす

君が居て助かるなどとおだてられ

倉吉市 奥谷弘朗

メモ通り亭主が廻る市場かこ

ひとことの詫び切り出せず和がくずれ

生意気な助言課長のカンにふれ

山脈を生甲斐とする職に生き

七回忌師ににらまれた気でならび

和歌山市 垂井葵水

地酒飲む口実ネオンにまぎれ込み

消防車そっちへ行ったという見舞い

抜き足で来てもリズムの狂う蟬

公害の大気の中の葉鶏頭

悪妻の標本ビール助けに来る

大阪市 本多柳志

書きにくいものに病氣の見舞状

宝くじ本気で望みもちはじめ

とびついてグラムと匂読みちがえ

つけ届け利いて順序が狂わされ

童心の頃の速さで走馬灯

愛媛県 渡辺 曉 童

駅でねる気へあかすぎる駅である

叱りてのない朝酒のせいなのさ

味噌がなければ味噌汁は止す二人だけ

休耕田とよあしはらの成れの果て

めがねかけると雨がきこえる

大阪市 水谷 竹 荘

押ピンを残してストのピラをはぎ

昼寝するはずだ夜釣りに行くつもり

お見合と知らずにしゃべり気に入られ

棚一つ吊るにも妻に指図され

麻醉さめるまで待たされる見舞客

八尾市 香川 酔 々

ペンよりも刀は強し文士劇

踏み切りはまかしておいてとバスガール

世話好きで轢に釘打つお人好し

珍客のアクアラングへ魚が寄り

足音も静かに変わらない恩師

新宮市 大矢 十 郎

大方はお上を恨む初精霊

日曜の汗は自由の名で涼し

乱れない歩巾で尺取虫急ぐ

子に涙見せまいドラマからはなれ
戦争はきらい長髪それで済み

大阪市 橘 高 薫 風

馬籠・妻籠にて三句

お六櫛われを籠らすひともなし

櫛の齒に秋の近づきいたりけり

雨上り猫はや歩く石畳

生き死には碁石のことでないのなり

ベトナムの難民に似た瘦昼寝

大阪市 不二田 一三 夫

ダンナかと聞けばヒモだと泣きました

陰と陽 仲むつまじい乾電池

六千万へ生まれ一億人で死に

寄席(二句)

前座でよし国会初演を待つ談志

家庭まで 妻突っこみを持ってくる

岸和田市 高橋 操 子

キリギリス声も弱ったかご三日

卒業をしたらお店をがんばる気

ゆっくりとしたい夕げをなる電話

加茂川の景商魂が取り入れる

堺市 吉田 圭 井 堂

親のない子ほど甘えるくせがあり
妻の持つどの免状も使わず
貸付に背伸びするなと断られ
日本の持つピストルは玩具なり

鳥取市 河村 日満

路郎師七回忌法要大会に参加して（二句）
ひまご弟子どもも来ている七回忌

宇治市にて（三句）

朝風呂の極楽にいる唄が洩れ
鵜飼船宿の浴衣の名で呼ばれ
冷奴の注文が出る宿の膳

岡山県 直原 七面山

春の土堤から恋の陽炎
例え話で愛の告白
冗談にとまどっている未亡人
幾度目の恋にも女命賭け

大阪市 山川 阿茶

無が有であること知った倅せ
呱呱の声約束ごとを背負わされ
人柄が見えるハンカチ麻の白
蟬時雨みどりの朝を神詣り

大阪市 西森 花村

太陽もおぼろにかすむG・N・P
元旦に見た覚えあり青い空
下乗札立ってた所に駐車場
不法駐車ついでに吸いガラ捨てて去り

大阪市 西 出一栄

一切れの鰻で夏やせ気を休め
風邪ひかされたクーラーをまだ愛す
逢い引きの花火に遠く水都祭
沈黙の野仏 すだく虫

大阪市 天 正 千 梢

貧乏に馴れても花をたやさない
能力へ物差し使いすぎ
「何とかするよ」悲しいためいき
バランスもくずされそうに理屈攻め

門真市 福 島 鉄 児

半分に聞いてもどきも抜く話
どないしなはったと出しゃばり膝を寄せ
別れなはれといと簡単に云うけれど
身上相談今のわたしによく似てる

出雲市 弘 津 柳 慶

台風へ山は敵としてそびえ立ち
罪を悔い再出発の目が綺麗

司会者としてネクタイを気にしてる
耐えに耐えてそつと別間で嗚咽する

竹原市 山内 静水

ネオン街そですり合うて睨まれた
ふり向けばつかず離れず妻のいて
十円のヒヨコが畳にしたうんこ

八月六日

夏の陣にも似て悲しかり原爆忌

松江市 中川 晃男

岡崎祥月氏の還暦を祝す

先輩・同僚・後輩に頭下げっぱなし
謝辞つまりつまり還暦の胸のバラ
氷かく音亡母と来たこの茶店
夏雲を望楼ひとつ支えたり

姫路市 隠岐 不酔

見合いにも借り着を着ててほらをふき
七人も産んだに戸籍二人きり
履歴書を見てこれ君が書いたんか
低い扶持行司横綱さばいてる

大阪市 有信 新之助

この寺も何処かへ行けというネオン
携帯テレビ先頭に退院す

九回の表暑さまで盛りあがり
風光明眉へ不便な足で着き

大阪市 福井 野迷路

這えば立て八十五キロの孫仰ぐ
孫娘袷紗さばきの指白し
明日ありと思う心に身を任かせ
テレビ普及考える人消えて行く

桜井市 岩本 雀踊子

押しのけて生きてやろうと腹を立て
耐えている強さも寡婦という姿
一枚の舌しかもたぬ男なり
がむしゃらに生きる汗が目にしみる

大阪市 木村 水洞

実力行使せねば話が纏らず
久しぶりどちらも禿げて弾む酒
生きている証抛溢れる裏長屋

鳥取

宇都市 石川 侃流洞

銭のいる設備がふえてきた砂丘
線香に死角があつて蚊に刺され
手にこより巻いて貰つて物忘れ
夏やせへ妻子五人がネジを巻く

盲点が意外なところにあつた事故

大阪市 中川滋雀

人間とは思えぬ記事に馴らされる

ホットパンツ明治の視覚をかきむしり

妻が居て子が居て満ちた部屋灯り

旅帰り夜汽車をエンジンヨイする若さ

京都市 都倉求芽

地に落ちた時からゴミとなる紙吹雪

齒磨をたつぷり今朝の陽へ闘志

汗拭いて拭いて働き蜂巣へ帰る

招待は香港・グワムへ掃きだめる

奈良県 石倉旅風

月明の散歩庶民の贅沢か

煮茄子のまったく変り果て撫然

理性剥き出しにして金を貯め

仰月院旅風日重信士

人生はさとりを仰ぐ旅なりき

京都市 松川杜的

わが椅子になりかけてきた五カ月目

ぼてじゃこ同士定退を笑い合ひ

信号の赤に日曜出勤笑われる

出し抜けに蟬が聞えて古都眠る

みちのくの旅(一句)

東大阪市 竹中綾女

三代の栄華を今に光堂

ガイドさん史家さながらに昔説く

芭蕉の句碑奥の細道思わせる

瑞巖寺伊達家の富を想わせる

松江市 小林孤呂二

ハプニング続き評論家楽しけれ

甲虫子孫も残せず死の籠に

とも角も十倍という話に傾けり

休耕田きりぎりす鳴く草が伸び

松江市 舟木与根一

目と鼻を分け親馬鹿へほめておき

手に手をとってどっこい生きている

やっこさ買うた切符で寝に帰えり

パママに見られあわてたメモ用紙

東京都 増田次章

退職の相談聞き役だけの能

悲しい人気者兜虫売られ

歓待もあまりのことに落ちつけず

悪友の瞳が行先まで語り

笠岡市 木山遠二

ばけないでくれと女房に頼まれる

失敗をしたのです。こし名を知られ
老夫婦あくせくしても用が無い
薬にも毒にもならず古稀を過ぎ

富田林市 岩田美代

話すみ貧しい心にかえるとき
前向きの姿勢で空白もて余まし
動揺を押える扇せわしない
つらい事噛みしめている暇もなし

島根県 堀江正朗

わが顔が見えぬ倅せ若くいる
おしっこがあんないい夢邪魔をする
手さぐりのまだるさ病妻立ち上がり
六十年歩いた足だだるからう

米子市 林瑞枝

宝くじ購うた内緒に夢があり
延着の揭示いらだつ初帰省
神様のお告げが欲しい岐れ路
適齡期ふたり障子さえも張れず

下関市 志賀木石

訪う度に故郷よそよしくひらけ
我れなりにやるだけやった汗涼し

D51を抜きつ抜かれつ追うカメラ
なかんずく己と妥協の五十年

松江市 岡崎祥月

趣味合わす妻 妻なりの句に生きる
煮て焼いて見ても同んなじ妻の味
人生の旅路還暦今終る
ふるさとのよさを便りのすみに書く

倉敷市 野田素身郎

間がもてぬままに二本目をつける
雷鳴しきり死の戦線の夢覚める
せつかくの休みを妻に邪魔がられ
透けてみえる服へ五六歩距離をおき

平田市 久家代仕男

ステテコへ部屋吹き抜ける風も秋
雑草の花は無慈悲に引き抜かれ
上阪の土産に寄席の灯をくぐり
風鈴が止めば籠からキリギリス

宇部市 平田実男

伸びる芽を教育ママがとまどわせ
義理で来たお通夜ねむ気が先きに立ち
中元の美風をデパートから習い
主婦が漬物切るように切り開き

岸和田市 福浦勝晴

古ぼけたビクに溢るる海のサチ

街頭で貰って破って捨てるピラ

論争が続いて夜ふけに出るうどん

ノックしてツケ置きにくる社長室

大田市 藤田軒太楼

割箸の定め一度で見捨てられ

平凡な日日茶柱を話題にし

その先が知りたいばかりに酌いでやり

理不尽な話を平気で持つてくる

大阪市 今西章雅

寢酒にと作った梅酒飲み忘れ

鳴かず飛ばず借金だけがない取り柄

行きずりのホットパンツが背丈こし

俺が総理ならと酔うてるコップ酒

倉敷市 小幡里風

若者の主張へ一本線をひき

平凡に暮して非凡となる記録

打ち水がまとも蟻の列騒ぐ

決心がまたも揺いだまわり道

小松市 四方天弘実

しめっぽい話はよそう刺身食う

惜しい句が思い出せない風呂上り

冷房車鳥肌立てているモード

おこしやす旅の疲れが消えてゆき

鳥取県 清水一保

亡き友の句もよみがえる魂祭り

精一杯名残り惜しんで蝶の夏

食欲をビールで誘い出す炎暑

ダイヤとは妥協はすまじ月の石

小松市 馬場魚山

子が出来てからは素顔の日が続き

毒舌へ目出度い酒の座が白け

大国になっても案山子みすばらし

美人でもないに眼を染め口にぬり

出雲市 原独仙

ステテコの無礼を妻の方が詫び

網を引く赤銅の肌陽は真上

盆踊りから結ばれて五十年

汽車電車乗り継いでまで特価市

米子市 八木千代

選暦の誇りはベンが錆びていず

悩むだけ悩めば開くだろうドア

身構える癖もいつしか寡婦ひとり

七光り素直に受けて風に乗り

伊丹市 小川静観堂

仏壇が手狭まとなつて俺の坐がな
いゲンコツで泣いたあの日がめぐり来る
妓生のアランもう一度夢になつ
月を尻目に真夏の夜を焰える星

大阪市 小出智子

古い日記を読むひとときの交響詩
慎ましくらしが馬鹿に思える日
過去となる今日をきれいな詩で綴り

ある農婦の姿に

横着なくらしサラリーマンの妻として

大阪市 室谷徹舟

振り返るゆとりも出来て五十坂
そう云えばそうとも読める上手な字
法要が終つて暑いのに気付き

七月三十日全日空機自衛隊機と衝突
その一瞬凍つた心墜ちるだけ

奈良県 草深醉升

成長のひずみだらけを持てあまし
信ずればこそお百度を聞こし召し
定員で運べば会社なり立たず

御寺にも税務署様の目が光り

西宮市 島居百酒

花言葉識らず娘に馬鹿にされ
肩書が辞めても世間に通る自負
捨て仔猫身分を知つた声で泣き
事故を気にしながら遊ぶ空の旅

笠岡市 木山要次

仏前に間に合うだけの花を植え
半分も喫わぬ煙草を踏んだ見得
躰にも厳しいさとの癖を出し
配当を貰いあれから手を出さず

堺市 高橋千万子

口実にする相性が吉とある
才女より笑顔がほしい嫁さがし
アルバイト規定の時間すぎた顔
好物を仏に供え知らず鐘

芦屋市 丸川初甫

曲線の自信ベルトなしの服
何恐れんや電柱上る南瓜
ママのミニ背の子の足ぶらさがり
得意気に鉾を教えて故郷です

和歌山市 野村太茂津

虹の橋たもとは過疎の古里か

明日は明日の風昨日も吹いていた

G・N・P・D51を隠居させ

亡妻に花を供えて腹がたち

広島県 高橋 鬼焼

松葉杖とれて不安な足となり

口止めの話を妻は聞きたがり

妻の組む予算はみだす子の育ち

実印を妻がつかせぬ妻の意地

倉敷市 竹内 翁 童

人生の落書きとしての回り道

明日からは他社となる定休日

時間切れ昼の休みの名勝負

麻がやの手ざわりうれしく母という

八尾市 飯田 一 治

お祭りの団扇背中で踊ってる

本当の話を本当の顔で聞く

老いて子に従う昼寝させられる

PPM数字で街に慣らされる

大阪市 川口 弘 生

あの月のどの辺と見る月中継

総辞退医師の白髪が目立つなり

医者の子ボ石切詣をすすめられ

身勝手な悔んで妻の病看る

八尾市 高杉 鬼遊

外人の方が詳しい法隆寺

満天の星を見て来た旅帰り

さい銭を手付のように鈴をふり

分類は人間阿呆度は不明

堺市 藤井 一二三

八月十五日終戦記念日(二句)

銃創痛むたびに平和を子に訓え

不幸な話ばかり保険屋持ち歩き

人間の慾を金魚の瞳が笑い

八月一日保険医問題解決

辞退解除待ってましたと熱を出し

岡山県 出原 敬 一

身に覚えあるから黙って笑っておく

絵日記のモデルになった非番の日

福祉への寄附とばされて侮辱され

他人から見てもお金のないわが家

大阪市 西川 誓 二

板前の下駄の高さに調理台

桑食べて蚕運命にさからわす

矢のつきた頃にコッソリ里帰り
心中とも知らずに宿は貸ゆかた

松江市

恒松町紅

絵に書いたように山脈夕焼ける
人間の無謀アスファルトが笑い
引き出しの隅で一円見捨てられ
風雪に耐え制服のたくましさ

笠岡市

松本忠三

数字には弱いと言って儲けとり
井の土用の鰻瘦せており
間髪を入れず仲居が擦るマツチ
嫁入った娘の孫に遠慮をし

松江市

柳楽鶴丸

妻へ感謝おいしいとほめてたべ
地球からの使者石を取って去に
男の一生無制限一本勝負
釣竿の手入れ武士に似た構え

愛媛県

村上旭童

向日葵を咲かせて夏が好きという
炎天の中で信号赤になり
男親今日は百円玉もなし
梅干を食えと夏ばてはげまされ

今治市 越智一水

貧しさへ暑さをよそに灸をすえ
うらおもて肌着ちがえるのも夏か
いれずみが来てから湯かげんまかしきり
ひと夏で浜のぶらんこくたびれる

鳥取県 森田布堂

飲める口だから定刻通り来る
残飯の始末上手な妻の腕

口止めをされたと白状してしまい
世話好きがいて猫の仔がみなさばけ

堺市 吉岡青香

出る杭は打たれ出なけりや忘れられ
急所にはふれず自覚を待ってやり
逆境が友の心を試してる
潔癖と言う我が俤を押しとうし

東大阪市 斉藤三十四

バイト賃大きく妻に食い込まれ
定年で祇園祭へ泊りがけ
スカートの短かさ嫁と比べあい
老いらくの金で済ませる恋もあり

鳥取県 鈴木村諷子

四の字がため兄弟のむつまじさ

ふところも知らず無理すな無理をすな
女の眼死火山に火を入れんとす
彼らしうていいとそのままさせておく

藤井寺市 西 いわを

かたづいてゐる部屋なれば横になり
秋茄子を育てるべしと剪定す

伊勢志摩合歓の郷

海と空と緑の丘の連がりて

島根県 藤井明朗

甘党へお酌は笑顔だけを見せ

人間の相克金にあやつられ

秋早し米の出来気にならず

岡山県 大森娛句楽

秋風を誘う気芒穂を覗け

思い出も副え老人会盛ん

素朴さのドンジヨを掬う腰の籠

大阪市 河井庸佑

十度の差しみじみ味わう高野山

落葉焼く煙にむせぶ奥の院

信玄謙信仲よく並ぶ奥の院

兵庫県 大江秋月

植木屋のまねも駅員やってくれ

夕立がクーラーにする佗び住まい
やせている頬へ太陽容赦せず

岡山県 池田古心

噛みしめる力が足りぬ総入歯

怠農振り病害虫が来て気付き

御し安しと見抜く女の大胆さ

倉敷市 藤井春日

一言で語るに落ちる悪あがき

夫婦喧嘩夫バチンコ屋へ避難する

ふしだらな女にや女の道があり

守口市 羽原静歩

再会はまだ風流の顔でなし

奥比叡にて(二句)八月四日

うなずいて比叡の風を聞いている

奥比叡墨絵のような雨が降り

高槻市 山田季賛

母ちゃんが引受けて来た仲人へ引き出され

満員車ミニ姿など言うことれず

嬉しさは僕にだけ有る務め

兵庫県 河原みのる

西瓜の目方貫に直さな承知せず

天下り鼻クソ弾くほどの役

パスポートここに生きてた菊の紋

笠岡市

出原真奇

能も無く男五十がよく眠り

思い通りにしますと娘も二十才

妻多忙犬が産み猫も産む

倉敷市

松下梁水

会者定離写真はあの日のまま笑い

演出という賞讃が派手過ぎる

清貧に慣れて日本一の妻

愛知県

大谷月都

定価表値上げスペースあけて置く

またしても試行錯誤のノイローゼ

命一下ストには素直な職場です

東大阪市

竹中肖二

旦夕に迫る冷たい掌を握る

惜別の土くれ少し棺に置く

日本円切り上げ庶民にどう響く

竹原市

森井菁居

暇の無い暮らしを平和とも思い

寝そびれて生きる疑問に突きあたり

原点を忘れて何が三次防

大阪市

江城修史

愛果てた女が男を批判する

お見事な粧い汗をふきなさい

底辺に折目くずさぬ暮し向き

東大阪市

宮西弥生

アイシャドー女ネオンの夜に負けず

灯を消せば胸かけめぐる人のいて

ミシン踏む今日休日もくずさない

堺市

伏見茂美

暑いからママも序に天瓜粉

がんばれよ入道雲が怒鳴ってる

せせらぎに飲物冷やす葦ず張り

大阪市

宮地双楽

幸福な余生に子等の和のコンビ

病んでから健康第一おそすぎる

邪心ない夜道の空に月は冴え

大阪市

河股緑水

良心の呵責があって口ごもり

パラソルの小さな影を子と分ける

倅な暮らしへ風呂の湯が溢れ

富田林市

木村弥栄子

公約の連呼こだまに侮どられ

傷だらけになって未練やっと絶ち

其の異に女の業は住みついて

姫路市 小畑自由朗

行水の捨て湯に蛙あわてたり

ロダン・エッチ裸で何を考える

病床吟

半人前が半身不随で倒れけり

八代市 永松道雄

クーラーで昼寝が過ぎて風邪となり

ナツメロに月も涙の波の音

諫早市 原田明春

娘に小言いえば妻から居直られ

沖縄返還協定

苦しめるだけ苦しめといつてもどし

★

北川春巢

お値段と相談もして味をほめ

診察をせぬ手の爪の伸び早し

角砂糖の数も彼女におぼえられ

億の山持つちよう人の愚痴を聞く

菊作り講釈だけの父となり

西尾 栗

羽搏いて鶏城壁にぶつつかり

ウオッカに酔い馬賊の唄に酔い

支那栗は袋のかさを並べられ

公平に三十八度線へ虹の橋

歓喜仏四十八手の一つする

菊沢小松園

千万のおもい指先だけの恋

崖くずれむかし千鳥の鳴いたこと

親の無い子供に早い灯がともり

金網の中の自由と知らず馳け

酒もなく膝もくずさず差向い

若本多久志

平戸にて

哀愁のジャガタラ文に涙する

平戸なるマリヤ観音悲しげに

名護屋城跡(一句)

太閤もにが笑いせん月斗の碑

デパートの虫も初秋をつけてくれ

カセットのお伽ばなしで孫哀れ

★

川村好郎氏は九月二十二日に退院しました。目下自宅で静養中ですが、再起は時間の問題です。ご心配をおかけいたしました。

川傍柳初篇研究

(九十九)

前田喜代人 川端柳風
故
岡崎重義 高須啞三味
清 博美 丸 十府
藤井和雄 岡田 甫

600 いそがしい医者危に近づかず

枅水

川端「いそがしい医者」は流行医者「危き」はもう死ぬときまったような重病人。名声も高まり、死にそうな重病人にかかりあつて「あの医者にかかったが駄目だった」という噂でも立つと、せつかくの地位も名声も危なくなるので、多忙を理由にこつわつたのである。論語の「君子危きに近づかず」の文句取り。
高須「賛。忙がしい医者は、忙ががつてゐる医者で、それを理由に危きに近づかぬようにしているのである。」
岡崎「賛。しかしヤブ医は勇ましい。皆な見放すに藪医の頼母しさ。 傍二 8
お委せなされと藪医のこわい事 宮三 13
藤井「今は健保の患者ばかり、点数かせぎで急がしいお医者様は流行れば流行るほど危きに近よらず、重症は入院させてしも。昔は名声、今は金で医者危きに近よらず。」

丸・岡田「諸説賛。」

601 金屏風立ると猿や象通り

泉河

川端「すでに度々出ている山王祭。祭にもけだものを出す麴町裏口を締切る時分轉来る賑やかさ家に勝たたる屏風立て山でも田でもたしかに見た屏風高須「猿は猿田彦、象は張り物造りの象。前者はともかく後者は山王祭の名物。祭礼に天竺を出す麴町」
岡崎「山王祭には神輿の先導として猿の山車（第一番が大伝馬町の誦鼓の鶏、その次が南伝馬町から出された幣束をかついだ猿）や、麴町からの鼠木綿の縫いぐるみの象が通つて、祭りも本番。」
丸・岡田「賛。」

602 夜の明くを待つてちんころ捨る也

眠狐

川端「ちんころは小犬。夜が明けてから犬ッ子を捨てるのも、せめて一晩だけでも親

犬の傍に置いてやり、明かるくなれば誰か拾ってくれるかもわからないという空頼みもあつてか。

高須「一晩だけでも親犬の傍においてやる」のでなくて、子供がどこからか拾つて来たちんころを、一晩啼かれて家中で音をあげ、夜が明けると捨てるという句である。

前田「どちらにも賛。深い意はない。ちんころを帯ひろとけですてに出る」

岡崎「高須説賛。ノラ犬の子であれ拾つて来て、可愛がる子供の無邪気さと、親の悲鳴がこもっている。」

藤井「『夜の明けるを待つて』で高須説に賛。『明けてから』ではない。子にだまつて捨てたかもしれない親の悲鳴。」

丸・岡田「高須説、賛。」

603 五ツかくして打て来る面白さ
川端「吉原の時は娑婆とちがい、吉原で一長

う四ツ（普通午後十時）は婆婆の九ツ（十二時）で、一時（二時間）の掛値がある。九ツになると拍子木を打ち、女郎は見世を仕舞い引き揚げるので引ケ四ツという。九ツの時の鐘がなるので時に鐘四ツともいった。また真の四ツに対して後の四ツともいう。やがて返しに九ツの拍子木を打ち、大引ケと称して大戸を卸して全く見世を閉ざすことになる。

吉原は拍子木までが嘘を付き 武一三・七
句意は九ツというのに、ここ吉原では引ケ四ツと五ツかくして拍子木を打って来る。相談をする内嘘の四ツを打ち

実と仇時も木の四ツ鐘の四ツ。

藤井〓賛。「五ツかくして」と一寸ひねっただけの句。吉原通人一年生の作句。

丸・岡田〓賛。

604 目を覚し下女は木櫛の炭をかき

眠 狐

川端〓下女の髪にさした安物の木櫛が、居眠りをしている火鉢の中に落ち、焦げはじめたのは「と目を覚まして、大あわてに木櫛の火を吹き消したので、木櫛の焼けた部分が黒くなったのを炭と表現したのである。」

高須〓拾いあげた木櫛に火もついていれば炭もついていたのである。それで火は手でたたき落とし、炭は口で吹きおとしたのである。

岡崎〓礎稿に賛。「炭」はむしろ「灰」と

解釈すれば、すっきりする。

藤井〓こげ臭きに目がさめた下女。やはり木櫛の隅を少しこがしたい。口で「吹きおとす」のでなく、手で「拭きおとす」のだから。

丸〓賛。炭とあるから、木櫛がこげていたのである。したがってふきは、口で吹くのでなく、手で拭くのである。

岡田〓句は火鉢でなく、おそらく朝飯を炊いているヘツツイの前での居眠り………と
605 鎌くらゝの田楽むかし羽根かはへ

庫 弓

川端〓田楽は田楽舞。平安朝頃から行なわれ、農夫の労を慰める舞踊であったが、後に芸能の一つとなり、もっぱら法師の手に移った。この田楽舞については北条高時が、田楽法師に変装した天狗と踊ったという話もある。

天狗ふりつけで入道をどるなり 一五・26
句意はその北条高時の故事を詠んだもの。羽根は天狗の意。

高須〓表現がむずかしくてよく解らぬ。礎解でよいと思うが「むかし」は余計、「鎌倉の田楽舞いは羽根がはえ」でよいはず。

前田〓礎稿に賛。
田楽は昔は目で見今は食ひ 拾四・11
丸〓礎稿賛。北条高時の田楽舞を鎌倉河岸の豊島屋の田楽に利かせたもの。

岡田〓同、当時有名な鎌倉河岸の豊島屋の

田楽を考えぬと句の「むかし」が生きてこない。

606 不都合な金主を女房こしらへる

五 連

川端〓既出「間男をとかまへたあす質を請け」（傍一41）と類句。夫婦共謀の美人局（つづもたせ）「女房の損料亭主五両取」高須〓五両の金主か？現代なら私のスポンサーさで連れて来る

清〓「不都合な金主」がおもしろい。

藤井〓賛。ただ問題は夫婦共謀か、単独かだ。礎稿と反対に女房が、色と欲気の単独犯と見られないだろうか。今ならさしずめ金持ちの男をひっかけたよろめき夫人。しかし金主というから、川柳ではやはり礎稿通りだろう。

丸〓小生も今までは美人局と解していたが藤井氏の疑問に接してそう解されなくもなり「不都合な金主」もそうすれば端的に生きてくる。「かし元のずるいで小銭廻るなり」（天二松3）の句は下女あたりであろうが、女房の場合でも、これに類した行為がなくもあるまい。

岡田〓その両方、どちらとも解される。

若本多久志著

「親ごころ・子心」

二八〇円

「老いの坂」

送料共五六〇円

送料共

「旅人」以後の

麻生路郎作品

— 12 —

三十四年八月号

不朽洞句帖

みおつくし鳴ったらパパも帰ってや

原始とはいいいない糸もまとわな

聖書持っていた売春婦のバッグ

奥さんもスリルの欲しい年になり

逢びきへ雨は広重ばりに降り

苦沙弥先生妻に一目おいて死に

平和主義者世に負けとは云わぬなり

大阪通信病院川柳会「實録」

聞かずともお女将とわかるどっしりさ

南海電鉄川柳会「ブレイキ」

小遣があるのでブレイキ掛らない

三十四年九月号

南海電鉄川柳会「立体交叉」

立体交叉刑事が一寸緊張し

杏林川柳会「八百長」

細君が笑って八百長バレちまい

大阪通信病院川柳会「早耳」

二号邸を買ったことまでもう知られ

三十四年十月号（不朽洞句帖）

奥信濃にて

志賀高原ここが山賊平とか

音痴ですがと女車掌の唄となり

志賀高原バスのスリルも味わわ

高原の俗化も仕事なるらしく

妻をたたせ一枚撮るも旅なれや

山と話そ霧のすがたもさまざまに

あの山この山見るものにされ黄昏がれる

山と対す山は何んにも云わざりけり

奥信濃空気の味も味おうた

南海電鉄川柳会「沿線」

沿線と聞いたに峠一つ越し

沿線で会えば保険の名刺くれ

大阪通信病院川柳会「妊娠」

二階借りて孕み別れて育てあげ

（傍島静馬）



46年度路郎賞受賞作品

灯台の夕陽

神話を抱きよせる

出雲市高松町

尼 緑之助

略 歴

昭和二十八年長い出雲市役所生活を退いて新聞販売業に専念したが、利あらず、九年前今の会社（谷本ハイヤー）に入り、従業員役員。中学生の頃から文芸をいじり、川柳にも若干の興味を持っていたが、昭和二年故路郎先生の「川柳雑誌」を手にするに及んで、開眼、川柳一本に踏み切る。九人の子持。

二賞発表

中島生々庵

昭和四十六年度路郎賞、並に川柳塔賞の決定を発表致します。

この二賞もこれで第六回を迎えるのであります。柳界の反響も広く、且深刻で各方面からいろいろご鞭撻のお言葉を賜わり寔に感銘致して居るところであります。本年度作品に対しては斯道向上の一助として忌憚ないご高見を承わりますれば極めて幸甚に存する次第であります。例年の如く路郎賞に就ては五名、川柳塔賞に就いては三名の推選者が既に発表された中間発表を基に精魂傾けての最後の十句を提出、去る九月四日の常任理事会に

において長時間にわたり厳しく検討が加えられました。その検討を経て、最終的に主幹の名において決定発表されたのが次の優秀句、準優秀句であります。従ってこの栄光に浴された作者にとりましては、ますます精進努力のご自覚と、世の批判に應えて頂く責任が約束されるわけであると存じ、将来に向って強く期待するものであります。

路郎賞優秀作

灯台の夕陽神話を抱きよせる

尼 緑之助

長い間作者が胸に温めておいた诗情が、一度にはとばしり出たような句である。下五の「抱きよせる」が、とすると上江りしそうなきめきを巧みに受けとめた川柳の眼は心

にくいまでに頭がさがる。

（生々庵）

路郎賞準優秀作第一席

久々の素足へ女たかぶつて

八木千代

同第二席

煩惱は裂けし柘榴に極まれり

吉岡美房

路郎賞推選句

北川 春 巢

路郎賞の行事も今年で第六回目を迎えた。推選の仕事も大事業なので、私をはじめのうちはずいぶんと固くなっていた。しかし目を

重ねるうち次第に、少しずつではあるが、その固さもとれて来たように、我ながら思える。といって、投げやりな推選句の選をして

いるのではないことを申し上げておく。

候補作品として四月目毎に発表される作品を見ると、かなりバラエティに富んでいるのに気付く。はじめの間は、私の予選をした作品の中に、各選者の推選句がたいは、はいつていたが、近頃では、私の予選の中になく作品が、他の推選者から推選されているのを見ることがある。そういわれてその句を見ると、なるほど立派な句である。それだけ作者や推選者の物の見方が広がったのだと思うと、川柳の領域が広がったことにつながっているわけで、誠に結構なことと思うのである。

では以下に私の推選句を十句発表する。

この俺を信じてつなぐ小さい手 次章
知らん間に二十二年も夫婦なり 与呂志
ひとり旅細道ながら夢があり 奈良子
濡れ衣を着たまま神を信じ切り 里風
サービスに白紙で渡す領収書 新之助
毛皮着て女にめぐる獣の血 薫風
たまに逢う恋は指先まで喋り つき子
骨にすぐ着物着たよな父達者 真奇
退職の子守は罷をつけたまま 可住
優秀句 木石
父の忌や父に習うた普門品

私自身の予選句を見ると、どれを推選句に

しようかと迷うぐらい、ほとんど差のない作品揃いである。従って正直いって、推選された句は、選をした時の気分によって決る、というような所がないでもない。それぞれの句にそれぞれの味があるが、決定的にこれだ、という句は少ないものである。しかし推選句は十句限り、と決められているので、推選に落ちた句には誠に申し訳けない。

今年は私の父の五十回忌の年忌に当たっている。命日は三月だったのだが、正月はじめから、帰郷して墓参をし、法要を勤修する予定を立てていたが、勤務の都合で、それが中々実現しない。そんな気持ちで居る時に選をしたので、優秀句が決ってしまった。しかし、そんな私情を離れても、この句は、亡き父を偲んでこの上もないよい句だと思ふ。しんみりしていて派手さはないが、現代川柳の一面を見せてくれている。路郎賞に値すると確信するものである。

路郎賞推選を終えて

若本多久志

年三回に分けた路郎賞候補作品の中間推進制度が、最終の優秀句を選ぶのにいくぶん楽になったとはいえ、大変責任の重い仕事である。つまり、優秀な候補作品三十数句からどれを捨てるかという苦労が、言葉にならないうれ胸をしめつける。どうか捨てた句主の方々

よ、ご諒察の程を。

結ばれた枝のみくじも春を待つ
煩惱は裂けし柘榴に極まれり 川端 柳子
下積へハイと答える妻のいて 吉岡 美房
美しく死にたい欲も持ちはじめ 山内 静水
人間のおしまひ箸で拾われる 本多 柳志
口紅が褪せて女の業果てる 工藤 甲吉
長男も嫁の実家へ近く住み 小出 智子
質屋へも通わせた肩揉んでやり 宮尾 あいき
大文字酔醒めるよりはかなしや 出原 敬一
準優秀句
ただれた心観音様が抱いてくれ 天正 千梢
優秀句
憂秀句 橘高 薫風

人間陶冶の詩

西尾

栞

煩惱は裂けし柘榴に極まれり
転ぶことさえ女という不便
沈痛に焼香するの債権者
かたつむり今更家を捨てられず
救いようない沈黙に雨の音
長男の下宿へ長男とゴロ寝する
手をつなごなんて結局みな孤独
幽車は個性の表現許さない
その言葉を教えた人は死んだんだよ鸚鵡

美房 克枝 木石 鬼遊 美代 柳慶 晃男 千梢 史好

京の庭みな善人にして帰えし

弥生

準推薦二句

タンタン朝は港のリズム持つ

水客

日御碕にて

灯台の夕陽神話を抱きよせる

緑之助

今更、大家お二人の句を準推薦にして恐縮だが、川柳の三要素以上の詩情を涵々と味あうことと、川柳の視野の拡さを、つくづくと教えらるる感吟として茲に推さしていただき

推薦句

一年分の声聞き貯める手の温味

正朗

秀句鑑賞で、佳吟の程は既に言いつくしてあるので、句は人格なりと言うことを言い添えたい。奥さんの芳子さんも矢張り柳人で、常に夫君を思う佳句をものしておられるが、この春頃入院され、未だに病床に伏されてい

路郎賞候補作品

菊沢小松園

生活にひびかぬ嘘は聞き流し
灯台の夕陽神話を抱きよせる

大鶴 喜由
尼 緑之助

銀婚すぎた以心伝心
あるときはつらら曲って見たかろう

渡辺 曉童
小砂 白江

米余る国で雀はまだ追われ

工藤 甲吉

転ぶことさても女という不便

小野 克枝

今日だけはネジ巻かれて踊るまい

岩田 美代

心ない人から知った二号の子

山 川 阿茶

兄さんで居ってほしいとことわられ

吉岡 美房

優秀句

読む自由捨てる自由へビラを呉れ

本多柳志

路郎賞候補作品

正本 水客

口笛が吹けて少年らしくなる

工藤 甲吉

言うなれば小骨の多い女にて

西森 花村

すし屋のふきんあれも拭きこれも拭き

有信新之助

年寄りのうれしききようは腹がへり

浜田 久米雄

これ心 王者の如く歩ませよ

福井 野迷路

久々の素足へ女たかぶって

八木 千代

通夜へ急ぎき白を桜と見て通り

遠山 可住

お向いのホームは冬の日が当り

福島 鉄児

誤字なんば直されても気が付かず

金井 文秋

優秀作

長男の頭へ手を載せやすき背丈

橋高 薫風

この作者にはめずらしいと言える平易な言

葉で破調が少しも気にならない。泌々とした親子の愛情が感じられて好ましい。

路郎賞作品推選経過

正本 水客

推選句は先ず各選者の推す優秀句から選ぶのが順当であるが、死とか忌とかを詠んだ句、テーマの新しくない句は可成く避けようと言ふことになった。

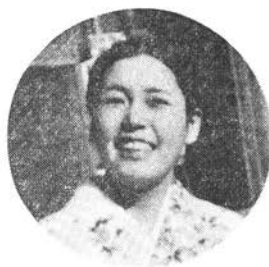
“大文字”の句と“長男の頭へ”の2句は秀句であり、同一作者の句であるが、同氏は川柳塔賞の選者でもあり、万人が文句なく推す句出現を楽しみにして今回は見送ることになった。

最後に残ったのは

“一年分の声聞き貯める手の温味（正朗）
路郎忌へ……の前書が付いていて、年に一度来阪される氏の心情が泌々と心をつつ佳句ではあるが、句の焦点となる「声聞き貯める」と「手の温味」の語は、氏が戦官の身であることの説明がなければ、独立した句として一般の感銘がうすいと思われるので惜しくも選にもれた。

次善の策として、2選者が選んでいる。
“煩惱は裂けし柵欄に極まれり（美房）”の格調の高さと、
“久々の素足へ女たかぶって（千代）”の美しい情緒を、準優秀として選び出した。

さて優秀句は全員一致して
“灯台の夕陽神話を抱きよせる（緑之助）”の詩情を推すこととした。



46年度川柳塔賞受賞作品

モナリザの笑いへ

私も笑ろうてみる

竹原市竹原町田中

生 信 笑 子

川柳塔賞優秀作

モナリザの笑いへ

私も笑ろうてみる

竹原市竹原町田中

生 信 笑 子

川柳塔賞候補作品

戸 田 古 方

葉桜よこのすばらしい息づかい 錦織 文子

天の恵 地の恵み

春風がトイレの窓からこんには 福浦勝晴

こんなところに青い鳥

冬来ると信じてスキー並べられ 近藤 秋星

暖冬かもしれぬのに

野仏の顔にも昨日と今日があり 岸本豊平次

喜怒哀楽、それに陽あたり、風あたりバ

スに乗り遅れてよかった花を見る

野呂 杜月

マイナスでなかったことを嬉しが

尼寺の花気がねなく赤く咲き 櫻村ふみよ

略 歴

昭和四十一年四月、山内静水氏のご縁で竹原川柳会へ入会。当時は高校三年生でしたので、ものめずらしく作句しておりましたが故梅忠先生、故白柳先生そして竹原の皆様のご支援をいただき、今日に致しております。近作柳會への投句は昭和四十三年一月号からです。現在「竹の子」のO・Bとしてがんばっております。昭和二十三年九月二十五日広島県竹原市に生る。只今家事見習い中
家族、両親、妹、弟の五人暮らし

セールの口見ていたらしゃべり止め 今井 松花

ボク少々恥しい 大本バット

おでん鍋汚れておでんらしい味 小谷葉子

創業以来煮つめつづけて 小谷葉子

地の果ての小さいちさい塔きずく

たとへ火の中、水の底 生信 笑子

推薦句

モナリザの笑いへ私も笑ろうてみる

至上の笑いをかみしめる。

ルネサンスの自由と封建の伝統の追分に

立つ半笑のモナ・リザ。社会批判であり、人生批判でもあるこの句。

どの句も真実の一角にふれている。どの句も幸福をうみだす心をもつ。

同第二席

柿 原 秀 子

空白の欲しさが草をむしらせる

川柳塔賞準優秀作第一席

モナリザの微笑に作者がわれ知らず笑みを浮べたように、この句を読んだ誰でもがはのぼのと誘われる非凡な句である。(生々庵)

ひと眠りしたら小さな欲だった

阪上十止庵

川柳塔賞候補作品

大坂形水

堀江 芳子
三宅 不朽
新刊書繙く思い旅前夜
ここに灯ともさんとして金魚買う

三宅 不朽

さつそうと歩くバググ開いていた 生信笑子

脊かれた日も何気なく化粧する 垂井千寿子

接待を終えて茶漬を喰べなおす 羽田 一扇

ひと眠りしたら小さな欲だった 阪上十止庵

足もとを視つめ私が恐くなり 三宅 不朽

本心を隠す刺繡の針を刺す 原田 輝親

昂奮したわたしへ遮断機が降りる 嘉数千代香

慟哭の肩に微力の手が迷う 志賀 美栄

地の果ての小さいちさい塔きずく 小谷 葉子

優秀作

空白の欲しさが草をむしらせる 榊原 秀子

柳友近く日巷に人は満ち溢れ

おでん鍋汚れておでんらしい味 江城 修史

悪党の霊前に花美しい 大本バット

何思ひけん女房のペン習字 岩井本蔭樺

土のない暮らしの人の冷たさよ 堀口 欣一

ひと眠りしたら小さな欲だった 大原 葉香

捨てた村へムチ打症で舞戻り 阪上十止庵

病めばなお夫婦のぬくみ子のぬくみ 村松 醉歩

川柳塔賞

橘高薫風

川柳塔賞選考経過

橘高薫風

（評）三宅不朽は第一回川柳塔賞の受賞者である。同君の句は、ややもすると俳句からの類想の臭みを感じるけれど、着想、表現とも奇をてらうことなく格調が高い。今年も受賞者に「新刊書」「金魚買う」の二句を得た不朽を推す。再度の受賞が不可能な場合は、堀江芳子の静かな悲唱を採る。心筋硬塞の病床吟だが、絶叫せず、落膽せず、こころがまるい。愛情に恵まれた一家の姿を思わせる。時に平凡はしたたかである。

第一回の川柳塔賞受賞者である三宅不朽氏は、今回は見送ることにして、生信笑子さんと榊原秀子さんの句を検討、

モナリザの笑いへ私も笑うてみる

さつそうと歩くバググ開いていた

の二句入選の強みで、川柳塔賞は生信笑子さんと決定した。選考時、推薦者の戸田古方氏は「モナリザの笑い」を分析、佳句たる理由を強調された。準特選には、大坂形水氏推薦の榊原秀子さんの、

空白の欲しさが草をむしらせる

と、三選考委員が揃って年間秀句十句の中に採った阪上十止庵氏の、

ひと眠りしたら小さな欲だった

の二句がすんなり決定した。

おでん鍋汚れておでんらしい味

の大本バット氏の句は、タッチの差で、小谷葉子、近藤秋星、谷のぶおの諸氏がこれに次いで惜しくも準賞を逸した。

祝 盃

尼 緑之助

驚きました。年令と共にいよいよ平淡凡々な作品ばかりの私に、路郎賞がこころがりこんで来るなど、奇跡です。

とは言うものの、やはりうれしい、感激は忽ち拡大されて来しました。暮れて帰宅したところでのこの報を知る。老妻と祝盃を重ねた食卓になりました。

昨年晩夏、日御崎で従兄弟会を催した時の作、いっそうなつかしく、その灯台を思い起した次第。

うれしくて

生信笑子

うれしさが一杯で、今夜はねむれるかしらと心配しながら書いております。モナリザのちよっとうれいふくんだ笑いが好きで何とか何にしようと思ひたのがこの句です。一体この女性は何を見て笑ったのかと、想像するだけでも楽しいではありませんか。

昨年竹原の近県川柳大会で十八位を取った

彼は賞らしい賞はもらた事がなく大変よろこんでおります。竹原をはじめ多くの入達の

ご指導のたまものと感謝しています。

路郎賞

川柳塔賞

候補作 品 中 間 発 表

自 四六年六月号
至 四六年九月号

路郎賞候補作品

北川 春 巢

着ぶくれた貧をぬがせる春の風

売言葉買わずに帰る春の風

竹の子の歯応え郷愁ふとよぎり

代々ののれんにかわる自働ドア

ノーマネーそんな時には空を見る

骨にすぐ着物着たよな父達者

京の庭みな善人にして帰えし

たまに逢う恋は指先まで喋り

制服を着て気味悪い大学生

退職の子守は髭をつけたまま

若木 多久志

人間のおしまい箸で拾われる

軽卒に夫も幸福と思ひ込み

一水

美代

恵二朗

葵水

一三夫

真奇

弥生

つき子

史好

可住

父を知る父への弔辞読み返し

目が合っただけで愉しい友を持ち

口紅が褪せて女の業果てる

長男も嫁の実家へ近く住み

冷凍魚不動の姿勢で値切られる

呑んべえに嫁いだ娘等の父飲まず

一人逝く旅路へ無情の雨しづく

質屋へも通わせた肩揉んでやり

ひたむきな愛へ男として報い

西尾

葉

歯車は個性の表現許さない

本人がなんといえますかと涙

嘘の世にまことがあってややこしい

その言葉教えた人は死んだんだよ鸚鵡

夕風へ島の動きもとまりなん

野心ない冷たい手だから握りしめ

気の強い姉の涙を見てしまい

可住

弘朗

智子

あいき

恵二朗

文秋

修史

敬一

七面山

こまでは本当これから少し嘘

しきたりに古い女でよいとする

はばたきを見守る母にある孤独

むき出しの刺をサボテン愛される

京の庭みな善人にして帰えし

正木 水 客

言うなれば小骨の多い女にて

年寄りのうれしききようは腹がへり

通夜へ急ぐ白きを桜と見て通り

箭のぬけがらというくくり縄

温泉の街の旅館もビルになり下り

山火事の跡真黒な杉並ぶ

金蘭の帯で夜も人形は立たされる

南爪の座禅を組みし姿なり

これ心 王者の如く歩ませよ

久々の素足へ女たかぶって

クラーが肌ぬぎで飲む良さ失くす

足が出ておたまじゃくしの名が消

鉄児

智子

瑞枝

求芽

弥生

花村

久米雄

可住

栗満

日満

綾女

求芽

奇童

野迷路

千代

形水

いわを

菊沢小松園

ばんばりへ日本の色で散る桜
怪我をした指ばっかりを可愛がり
兄さんで居ってほしいとことわれ
野心ない冷たい手だから握りしめ
揚げ花火亡びるものの美しさ
長生きをしすぎましたという握手
踏切番たまには赤色振りたかろ
上を向けば俺にも青い空はある
いつまでも女でいたい花を活性
読む自由捨てる自由へピラをくれ

潮花 鬼遊 美房 美代 白汀 水客 芳朗 遠二 克枝 柳志

川柳塔賞候補作

戸田古方

バスに乗り遅れてよかった花を見る
葉桜よこのすばらしい息づかい
馬鹿野郎とは僕のこと灯を消して
悩みそれぞれに大中小ジョッキー
ひと眠りしたら小さな欲だった
尼寺の花気がねなく赤く咲き
お人よし沈黙という手を忘れ

杜月 文子 醉歩 美子 十止庵 ふみよ のぶお

大坂形水

モナリザの笑いへ私も笑ろてみる
灯をつけてこんな広い妻の留守
地の果ての小さいちさい塔きずく

笑子 南奉 葉子

さっそうと歩くバッグ開いていた
春うらら飲み込む河馬の大あくび
酸素吸うベッド見つめる子へ詫びて
ひと眠りしたら小さな欲だった
わが汗の滲んだ帽子棄て切れず
末っ子巢立ち家飄々と風ぬけて
本心を隠す刺繍の針を刺す
慟哭の肩に微力の手が迷う
地の果ての小さいちさい塔きずく
空白の欲しさが草をむしらせる

笑子 芳子 十止庵 ろ亭 文子 輝親 美栄 葉子 秀子

橘高薫風

何思いつく女房のペン習字
遠方の桜が好きな自家用車
病めばなお夫婦のぬくみ子のぬくみ
小商人昨日の損はもう忘れ
こころに灯ともさんとして金魚買う
ひと眠りしたら小さな欲だった

欣一 秋星 芳子 比呂路 十止庵

中位とは寛大な自己評価
ゴキブリを叩く親しき客の前
土のない暮らしの人の冷たさよ
嬉しきものよ百円の百合が咲く

のぶお のぶお 葉香 静香

やうと二賞がきまった。毎年十月号から翌年の九月号までの十二冊分の中から十句えらび出すのだから大変なことだと思ふ。直木賞の選考委員だった海音寺潮五郎氏はいにおりてしまった。一週間はほかの仕事が出来ないというのである。一日十枚書くとしても大きな損失だ。(稿料だけではない、年令的にみても、あと何年生きられるかだ)

毎週月曜日の夜七時三十分からの『全日本歌謡選手権』(大阪ではよみうり10チャンネル)の選考者である作曲家の船村徹氏の辛らつな批評は定評がある。古賀政男氏の批評は甘くて聞きづらかったが船村氏のそれがほんとうの親切だと思つて、毎週かかさずに見ている。このメンバーには淡谷のり子女史も加わっているが、そのかわりこで十週勝ち抜いた人のはとんどは、りっぱにプロとして通用している。これが選考者の眼だ。(F)

記太平チバク

八 大 野 東

おふくろからきいた話だが、私のおやじが
若いころは、相当な極道者であつたらしい。
小バクチに凝つて、こども二人と添寝しては
るおふくろの頭の上の蚊帳まで持つていつた
そうである。

ほんに伊右衛門殿そっくり
だつたそう。その親父の血をひいたわけ

でもあるまいが、私の若いころにもその罪障
はある。花札、麻雀、サイコロ、競馬、玉突
きと巷間世に通る賭けごと類の遊びは、すべ
て一通り経験した。戦争で、隻手になったト
タン、ぶつりとそうした不浄の遊びと文字
通り手を切つた私だが、五体マツモならまだ
そうしたモノとは縁が切れずにいたかも知れ
ない。

敗戦直後の北京陸軍病院は、他の病棟はい
ざ知らず、手足のないわが骨傷病棟などは一
大鉄火場と変じ、どこで手に入れたか花札、
サイコロから手作りの麻雀牌の賭場が至ると
ころで開かれていたものだ。現地召集兵の私
は、面会にくる女房に腕時計を二十幾つも預
託され、義父もその数の多さにへきえきして
途方にくれたのを覚えてゐる。つまり、わが
戦友たちの賭け金のモトでに手取早く役に立
つのは、腕にある時計しかなかったわけであ
る。

陶磁器関係の業界紙の編集に携つてゐる私
は、縄文、弥生時代の発掘古陶器ともゆかり
を持つてゐるわけだが、その古窯の陶片から
当時すでに賭博が横行していた痕跡がありあ
りとみてとれる。有名なドイツの賭博研究家
ジークハルトは、賭博は人類創生と同時に発
生したといつてゐる。つまり古代人の大自然
の災害や疾病などの生死をめぐる祭祀のなか

において賭博が胚胎したといふのである。

中国の歴史を原始時代にさかのぼつてみる
と、すでにそこにはサイコロがあつた。数の
発見と同時に、それは賭けを生んだのであ
る。開基は三國時代であり、麻雀はなんとそ
れより二千二百年も以前からあつた。伝説に
よれば禹帝の世に創られたとある。麻雀は板
から生れ、サイコロが原型であり、そこから
黑白がつき碁が生じたといふ。

麻雀といへば、川柳人にもマニアが多いが
私も大陸時代は完全にアタマへ血が上つてい
たものだ。雀品の高きはあくまで隻手にある
のだが、今の私にその資格があるにしても、
牌積みに肩が凝るのでキツパリと捨てた。麻
雀は清朝の瓦解によつて、宮女が民間に散ら
ばつて普及したとあり、また関東大震災に、
見舞金を公募するため、北京で万国麻雀大会
が催され、全世界に普及したといふ。だが
日本へは大和朝廷へ朝鮮経由で移入され、王
仁という百済の婦人人が元祖の由。もっとも
それは牌でなく紙牌だつたといふ。

ついでに麻雀の講釈を書いておくと、いま
の骨牌の絵柄は、紅中が王侯貴族の栄達の夢
を現わし、緑発は財殖家を現わす。白板は無
垢なる女性を示している。筒子は銅銭を示
し、索子はその銭差しのヒモをさし、万子は
発財の理想単位を示すといふわけだ。北京の

中国人にきいた話なのだから一応たしからし
いが、花牌の貴人は孔子、老子だというのは
マユツバものである。

徒然草にはバクチの害毒を説いたうたが幾
つかあるが、建武のころの塵塚物語（一五六
九）に拠ると、陣中の軍卒の遊びはサイコロ
と連歌であったそうだが、それらの群兵らは
刀やヤリがなく、素裸に簡単な具足が多かっ
たのに愕き、調べてみると、みんな陣中のバ
クチのカタにとられた奴ばらだったという。

宝暦五年の「牛馬間」（一七五二）に拠る
と博奕必勝法として「一心二物三上四性五力
六論七盗八害」とある。一心とは負けても平
氣二は物量（負けても張り高を倍増させる）
三は技倆。四性は口達者、七盗はイカサマ。八
害とは負けたら相手を殺傷することである。
「さあれば、この勝負ごとというのは、内心に
破戒の罪深く、外儀に五常の罪重し」と最後
にこの本には殊勝な講評がついている。

江戸時代の初期、寛保二年（一七四二）に
出た有名な「公事方御定書」は、バクチ大禁
圧の集大成だが、御定書百力条の第五十五条
に、柳人のわれわれが興味深い一項がある。

「三笠附、博奕打、取退無尽御仕置の事」が
それである。その規定によると「句拾い」と
いう刷り物を売り歩き、あるいは人々の印を

つけたものを集めるものは、遠島、家財取上
げ、非人とする——と相当苛酷なものであった
三笠附は、前句附または冠附から出た遊び
で、貞享年間（一六八四—一六八八）が最も
さかんであった。この方法は、宗匠が下の句

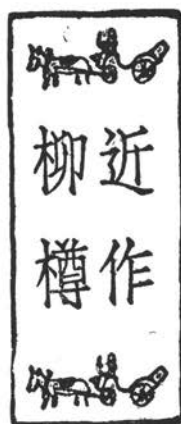
を出し世間の人々から上の句をつけさせ、そ
の甲乙により金品を賞として出した。たとえ
ば「やすいことかなやすいことかな」の下の
句の出題に「一文の思いのままに辛がらせ」
と上をつけるといったものだ。だがこれは一
般向きではないというので、宗匠が上五句を
出したのに中七、下五をつける。この方法が
三笠附、冠附というのである。しかし、これ
も人氣が集りにくいと、しまいに中七も下
五もすでに刷りものにして、その二十一例に
丸をつけさえすればよいというものになり、
それをばらまき、銭十文を投句料とし、点者
にさし出す。点者はその入選一句を仕上げて
保管しており、それに適したものに賞を出
した。やがて、これもだんだん手が込んでき
て句から数になり、頭と中と下の三つが適中
すれば「巻頭」といって金二両になる仕掛け
を作り出した。

前句附が世に出た万治元年ごろから百二十
余年経って、こういうバクチ俳諧が出現し、
その三十三年あとから柄井川柳が立机したこ
とになる。大先輩の武玉川の慶紀逸も、さぞ

かしの三笠附事件には手を焼いたことだろ
うし、種々の迫害も受けたことが予想される
わけだ。私はこの三笠附前後のくわしい記録
が目下興味中心である。

私はそのかみ本誌で中国トバクのちーはー
について書いたので、二番せんじはやめにす
るが、要するに今日の賭博は、太古の人間性
から、全人類の衆知をあつめ、いわゆる合法
合理的トバクの近代化に政府も協力あげ、公
營競馬、競輪、競艇、宝くじを作りあげ、道
路、学校、病院等の公共福祉厚生施設を強化
充実にその実をあげているわけである。公
務員はなべて麻雀、囲碁、将棋につよいこと
も、あわせ大当りの東映ヤクザ映画のショウ
ケツぶり等をこらんださい。バクチとは人間
の本性そのものであることを合点するわけで
あるが世をあげて注目せしめたネズミ講も、
戦前のオランダのトンチン法の亜流である。
同国は国法でこれを禁止したが、日本の九州
にそれが上陸。もともとも数から出たバ
クチが本態なのである。

ニコソン・ショックで、紙屑になったドル
のビラミットの衰れさを迎えたこの日、私は
これを書きながらニコソンも、宝暦五年の牛
馬間に拠るトバク必勝法八目を読破実行に移
したに相違ないと確信してやまないのであ
る。ああ、バクチ万歳。



川村好郎
若本多久志
共選

大阪市 里 小路

大阪市 阪上十止庵

これが文字かと墨書展に佇ち
定年を知らない汗を労われ
口添えが居てお中元地味になり
鈴虫を貰ってもらう茄子を切る
親友やさかい叱ってくれる酒

島根県 谷岡芳枝

朱に炎えてのうぜんかずらよ誰を恋う

七夕へ風鈴はずんだ音を添える

事故現場すれ違ふ蟻また喋り

虹の彩抱きつつ鯉の夢むすぶ

島根県 堀江芳子

幾曲りわが人生を試されて

愚痴みんな吸ってくれそう月あかり

この夫へ生きねばならぬ注射打つ

慰めにくる捨犬へ別な皿

駅前は最後に飲める灯を残し
楽しみというチャンネルがままならず
役に立つ娘を他人がくれという
L寸は着ても上位に遠い妻

島根県 錦織文子

真紅に燃えてグラジオラスの微笑

小鳥になつて見たいアンテナの夢

馳けてかけてキヤッチ人生の变化球

蛇の目さして日本の雨の音を聞く

島根県 榎原秀子

盆近し桔梗悲しい色を着る

人恋えばみんな悲しいものに見え

駆け足の雲の行末にある不安

平行線きびしいものをうちに秘め

大阪市 黒田真砂

人生はりズム狂わす人があり

いつからか夫は手酌のビール飲み

子には子の意見もあって夏の旅

偽りの涙が愛を覆す

和歌山市 檉 村 ふ み よ

壁紙の両はし持ったままけんか

集金のぐちも聞いてる雨の午後

梅雨明けをかみなり二度も念を押し

見送った涙の顔へ傘をさし

尼崎市 中 谷 利 美

下を見て暮すなローンこれにあり

街の声聞くにマイクの無礼者

ポスターが寝た子を起す旅ごころ

昔より金で買えないものが減り

大阪市 本 間 満 津 子

内臓の在処が判るしんどい日

こうしてはいられぬところで昼寝をし

清掃車乙女の祈りでやって来た

白杖のわが触角は短かすぎ

竹原市 三 宅 不 朽

憎み合う涙しあわせかも知れず

女よりたゆたう波のなまめかし

父と子のアメ玉ほのぼのと対話

お地藏さんごめんね父ちゃん酔っている

大阪市 河 原 林 比 呂 路

人生の坂道妻に手を取られ

洗っても心のしみは取り切れず

露出過多もう限界というパンツ

新入社一度は上司の目に止り

東大阪市 落 合 思 月

父の日にビールの小びん別につき

まだなにか云いたい母を瞳で押え

電話口別居の妻がそっけない

参観日家の子だけが手をあげず

鳥取県 両 川 洋 々

天草にて

殉教の鳥はドラの音まで噓せび

平戸にて

妻の目の届かぬ酒に酔いつぶれ

呼子にて

酔うた素振りで仲居の手を握り

小浜温泉にて

湯の街のヌード跛が出て踊り

八尾市 高 杉 千 歩

法隆寺にて百済観音

中宮寺菩薩の肌の温もり伝う

明日開く紅蓮を待つ鯉が寄り

蓮の花ひとひらゆらりと鯉の背
写経する心のかげり字がゆがみ

和歌山県 ふきあげ

虎 城

完結の字幕ひとりの手錠鳴る

灰皿で女しんみり嘘を告げ

溜め息もこめて投句の封をする

パズル解き終了脳細胞過熱

大阪市 小 谷 葉 子

男装のベレーに過去は朽ちてゆく

万緑に染まる心は果てしなき

花びらの温もり女を意識する

コインロッカーへ陰謀をあずけおく

岡山県 嘉 数 千 代 香

別々な夢が飛んでるシャボン玉

つまずいた石に言葉のある如く

荒波のうねりに耐えて来た笑顔

羽曳野市 大 峠 可 動

生活の話などして箸をとる

誰れも知らぬ倅せ心の奥に持つ

今日耐ゆる一語ところに絶すまい

守口市 岸 本 豊 平 次

背のびして見ずにすむとこ見てしま

大工がたたいて修理の個所がふえ
心頭を滅却してか僧衣行く

大阪市 柳 原 静 香

孫が来る今日は掃除がゆきとどき

娘の家で割箸が出る味気なさ

ふる里は台風だとよ流れ雲

大阪市 矢 谷 詩 腕 郎

能登あちこち

妙成寺百万石の一とかけら

輪島塗梅雨の工房未成品

千枚田能登の蛙は産みやせて

鳥取県 山 形 春 海

心では和解だまってビール注ぐ

ビジョン追う心は老いず夕焼ける

裏切りを認めピエロに似た心

和歌山市 増 田 め ぐ み

湯上りの無我夕映えの日本人

雲わびし代筆されて来た返事

好きだった百合香っても不帰の人

米子市 増 田 竹 馬

若鮎は焼かれるまでを描かれる

向日葵の自信灼熱に立ち向かい

孫九人春は丁度になる吉報

羽曳野市 麻野幽玄

噂より信じたい子の長い髪

弥陀と居る安らぎの間の蟬時雨

律義さが哀れ炎暑へ茄子の花

氷見市 関美子

倒産を知らずや熱帯魚がお産

きめられたレールの上の悪あがき

女もう過去を語らず鯨さく

竹原市 楠貞子

腹具合 合わせて夫婦粥にする

炎天にカンナは紅で抵抗し

神の目に悪女にうつる氣を使い

松江市 本庄快哉

マネキンの裸にこまる目のやりば

女性ではなかった雅号初対面

むっとする顔に魅力のある総理

新居浜市 近藤英府

大阪弁悲しいことがささり言え

愚かしさ正直に正直に言い直し

交差点決意を通す青が出る

長野県 今井岳太

泪もろさへひとりで発つホーム

霧ヶ峯高原(二句)

高原に寝そぶれば僕も又虫けら
母として一途再婚へ耳かさず

鳥取県 林露杖

ビヤガーデン女二人の大ジョッキ

父と子の笑顔ビールをのみ交わす

氷水サクサク毀れた恋の音

松山市 谷のぶお

腹の立つ顔がテレビにまた写り

薄情な街夕立へ軒がない

船室で着更える女奇術めき

島根県 東原福子

母性愛めざめて背信しりぞける

七夕の笹にゆれてる願いごと

墨流すように宍道湖たそがれる

鳥取市 有田鹿の子

起されてせっかく逢えた母の夢

マヒの手の病夫へスイカの種も取り

寝言だと放つてもおけぬ子の秘密

羽咋市 三宅ろ亭

モノグサは今年も他家の菊を褒め

クラス会五千円也軽く取り

オレだけが凡のようだゾ六十年

青森県 岩淵一星

合唱の忘れたところで咳にする

仏壇の顔にだんだん俺が似る

母はまだ忘れぬ僕の塩加減

堺市 栗本 藤持

寝苦しい夢ふるさとの川に浴び

屠牛場と知らず息せく角の列

夕焼の海女に若さの乳が張り

大阪市 岡本 まさひろ

血も涙もないような奴にものど仏

夏野球テレビに氷裏乗せてやり

半分は酒の加勢が言わしてゐる

大阪市 堀口 欣一

この奥に駐車場あり散髪屋

東京のきれいなとこだけ見て帰り

五十銭がまだ生きている松屋町

島根県 安達 潮音

住みにくや金と人との噂だけ

暑中お見舞ご無沙汰詫びるよい言葉

つばくろの巢立ち案じて鱗雲

新宮市 川上 久司

国訛り増えて故郷の駅近し

標準語下宿へ預け帰省する

今日の嘘飾って日記行を埋め

樫原市 岩井 本蔭 棒

スワッピング意味のわからぬ妻でよし

豚でさえ豊葦原の米を食い

頬つべたに足形つけた月が出る

大洲市 堀内 曉風

気休めと思えど易に立つ迷い

対話にもならず息子の反抗期

氷店夕陽をはじく竹すだれ

仙台市 川村 映輝

母親は強しそうしてずうずうしい

夏がれを七夕様に助けられ

百姓の顔した百姓すでになし

鳥取市 藤本 佳女

信じ切る夫だ寝言気にとめず

花好きの亡夫の残した種を蒔き

クーラーの一等場所に仲がおり

鳥取市 藤本 鎮也

懐しい校歌へ明治若返り

夜を稼ぐ顔を鏡でたしかめる

乗り馴れた古自転車捨て切れず

鳥取市 藤本 和宏

返事して見れば寝言は向きを変え

鏡台へ母若返えるうれしい日

意地悪なカメラにアクビ写される

今治市 渡 辺 南 奉

灯を消してからの自問を妻が邪魔

タンゴともワルツともなる海の音

し・あ・わ・せと背へ書く指が震えてる

和歌山市 垂 井 千 寿 子

この星の下で幸福掴めそう

裸一貫言葉だけでもたのもしく

借金をちよつと終りにふれる筆

高槻市 山 田 ス ミ 子

墓へ腰かけてるアベック陽がくれる

雀にも考えが有る餌をあさり

電話口上手にさばく話聞く

岩国市 村 井 西 合

いじらしいほどに自分を出したが

式すんでからおもむろに「好きだった」

清純にすぎて桔梗の白わびし

大阪市 今 井 隼 人

親の前だと娘足を出し

満員車知らぬ娘のぬくみ来る

函車を互いに合せ老夫婦

高知市 竹 崎 寛

女の城燃えろ燃えろ性哀し

二人いま琴を鳴らした日に触れず

岡山県 山 田 止 水

D51のように勇退させられる

負けて勝つ思案がタバコに火をつける

宿毛市 山 本 窓 花

咳一ついやに響いた夏季講座

コンクリの小さな割目に出了尾花

呉 市 楨 田 英 詩

台風接近風鈴軒が急を告げ

身二つになる借金を実家がえり

備前市 武 内 雅 堂

クーラーへ田舎の母が落ち着かず

親のない子をまんやかに夕涼み

大阪市 西 本 保 夫

また意地を通したくなる平社員

宿直の月を見上げて平社員

新潟県 高 野 不 二

七人の敵に備える靴みがく

森光子流にけなして仲がいい

鳥取市 近 藤 秋 星

移り来て故郷想わす虫の声

台風を一瞬消して汽車が過ぎ

小松市 村 井 城 南

両下肢麻痺で再入院

病状を話し病室の人となる

顔色がいいなと見舞い喜こばす

富田林市 板尾凡吉

なんとなく生きて抵抗変えてみる

限界を悟り逃げ道考える

七尾市 松高秀峰

帰省して車の並ぶ村の道

三人の子それぞれに車で来

河内長野市 森本黒天子

老妻に病まれて老いの不甲斐なさ

生活のゆとりを金魚に寄せている

香川県 西山綾子

ざこ寝して一夫多妻の籠の虫

三食を茄子と胡瓜で賄なわれ

島根県 中島英子

戸籍では他人のままの孫にあい

しあわせな笹七夕へ彩られる

八尾市 高杉力

本物の恋ゆえ素手でつかまえる

転宅の庭の広さを犬という

守口市 樋口一峯

しつくりとさつきは石に添って活き

灼熱へ一挙に吹き出す蘇鉄の葉

松江市 興富喜子

終戦日またも思い出子に語り

いい名前つけて出産だけを待ち

東京都 宮崎美津子

墓参る母子の会話ふと途絶え

堂々と日焼け外勤三カ月

今治市 薦本昌道

食卓へ一人欠けてる反抗期

親と子の距離へうるさいハワイアン

竹原市 生信笑子

若草の香り少女は何をうったえる

考えて考えて別れゆく二人

備前市 武元柳子

荒壁のままの新居に夏の菊

網戸はめばったのように住んでいる

松原市 玉置重人

気安うに痛みまつかと歯医者さん

ジョーカーがほしい失意の日が続き

新宮市 小山峻

七十五日過ぎた噂も涼み台

縁もないダウの高値はよろこべず

大東市 荒木鶴翠

孤児の眼が俺も天下を取ってやる

はだか球ぼつんとひとり無人駅

大阪市 塩 満 敏

海も山も商魂だけがのさばって

鳥取市 藤 本 恵 子

追い越したとたんにパトが手まねきし

愛媛県 小 山 悠 泉

亡き母に一目見せ度いカラー買う

今治市 原 田 輝 親

雑草と対話息抜く休耕田

大阪市 大 住 文 子

迎火のゆれてる果に赤とんぼ

今治市 古 野 伶 人

苦にならぬ明日をさがしに行く祈り

大和郡山市 森 田 カズエ

義理という匂いも包むお銭別

大阪市 岡 部 シ ゲ

八百よろず念じ産声待つ廊下

泉佐野市 大 工 静 子

学友と話残して市場籠

大阪市 松 岡 進

米寿まで女らしさがまだ残り

守口市 野 呂 杜 月

追憶を大切に生きて孤独なり

大阪市 村 島 秀 村

無雑作の一言他人を狂わせる

和歌山県 坂 本 安 代

ノースリーブすでに天下の秋を知る

大阪市 花 田 繁 子

公約はどの党聞いてもうなずける

東大阪市 藤 田 飛 鳥

児の涙駆けて来そうで振り向けず

偶然が有りそうで歩く夜の街

合格へ心づくしの鯛がはね

流行歌ごちゃまぜにして祖母唄う

桃栗三年善因未だ果とならず

日本の半分雨に泣くニュース

万歳をして寝る妻の高髻

ホットパンツ惜しい所に何の疵

山桃の味に故郷思い出し

笹竹に願いのたけを結びつけ

気に入らぬセット鏡をにらみつけ

親切な嫁父の日にプレゼント

目を入れてくれと待ってるだるまさん

幸は金で買えないものを得て

一輪の百合の香りになごむ顔

そっくり賞やりたいまま事ママの真似

大阪市 木 村 濁 水

花火よりデート楽しむ水都祭

夏祭り天下晴れての二日酔

愛媛県 渡 辺 都 留 逸

年金のくらしにすぎた中ジョッキ

まだ本を買う気のあるを良しとする

新宮市 大 矢 と み 子

うしろにも目のあるように髪を結い

気が付けばUターンできない恋と知り

鳥取県 福 田 陽 山

若き日の顔なつかしき六十路

寝言云う孫の育ちとほほえまし

大阪市 藤 田 頂 留 子

暑いかと高見で笑う入道雲

大阪市 平 井 露 芳

スタジオのプールで海の船がしけ

寝屋川市 福 富 隆 子

出産の祝いのように電話つく

鳥取市 佐 々 木 静 泉

アルバムをそつと整理して娘は嫁ぎ

今治市 今 井 松 花

コンクリの谷間で僕はヴァガボンド

大阪市 木 村 久 子

気のゆるみ鞭うつ人は我心

西出一栄
集

『ねっくれす』

近日発行
送料共六百円

西出一栄さんが句集を出す。一栄さんは故白柳さんに手引きをされて川柳をはじめた。ご夫君もかつては川柳を作っておられたが、ご自分は家業に打ちこみ、一栄さんに川柳を専念させる夫婦愛は有名である。

「おらかな句を作る人です」霞乃先生がこんなことを云われたことがあった。

新かななど、文字のほうだけお手伝いをさせてもらった。 — F

発行所 大阪市南区鰻谷仲之町二〇 川 柳 塔 社

黄銅六角ボルトナット
及び特殊換物全般

合資 西出螺子製作所
会社

大阪市天王寺区空堀町八番地

TEL 3452114

夜間 062 4408

柳々会小浜紀行 (下)

西尾 葉

九時四十分、蘇洞門(そもと) 観光の船が宿の裏から八人を乗せて出た。今朝はすっかり晴れて、静かな日本海になっていた。鋸崎の灯台を左に見て、松ヶ崎を出ると、先刻ほめた、日本海のうねりがきつくなってきた、やっぱり湾と外海とが、はっきりわかった。例によって、どこにでもある、亀石やライオン岩の説明があったが、あみかけ岩だけは、他で見られない、そのものずばりに感嘆の声をあげた。私達の雇った船は、六十余りの船長一人だが、舵を片手に、マイクをもって、汐に鍛えた良いのどをきかせてくれた。

『今日は運の良い日で、蘇洞門へ船が横付け出来ます。波の荒い日はとてとても、傍えも寄れません』というて、洞門の棧橋へ、エンジンの音をゆるめて入って行った。花崗岩の柱状節理で出来た大門、小門をバックに思い思いのポーズでシャッターを切った。水は綺麗に澄んで底の底まで見えたが、魚は見えなかった。鰻で船はバックオーライと、後ずさりに棧橋をはなれた。

『よくもまあ!!』と釣の名人の圭井堂が声

をあげる程、小さな岩礁に、一人二人と磯釣りの人達が散らばっていた。

帰りの船は、他人のおらない気安さで、誰が歌いだしたか、なつメロがとびだして、果ては小学唱歌から軍歌まで、船頭さんが気をきかせて、マイクを船室へ入れてくれたのは、恐縮した。

十一時半再び船は無事、元の宿の裏へ着いた。

『海のある奈良』というキャッチフレーズの小浜市は、国宝や重要文化財のお寺が沢山ある。予定通り、お寺巡りを、ハイヤー二台に分乗して出発した。

『最後はお寺詣りか』

『そろそろ行こうぜ』

口だけは達者な連中だ。

先ず明通寺に詣る。苔むした高い石段を登る。若葉の中に埋もる鎌倉前期の松皮葺の三重の塔が最も印象的だ。拝観者は若いヒッピー風の外人のアベックと僕らだけ、閑かなことこの上なしだ。帰りに庫裡をのぞくと、大黒が一個三〇〇円の土産人形を、せつせと拵

えていた。待たした車を次の寺、万徳寺へと走る。萱葺のどっしりした田舎家がところどころに見えるのが珍らしい。夜は螢が飛び交うという話を運転手は当然のように言う。

万徳寺は、埋石式庭園と天然記念物の『山もみじ』があるお寺だ。本堂は上にあつて、扉が開いているから、勝手に入って拝んでいいという。成程扉があいているが誰もいない。和尚の座る赤い座布団の上へ葉子さんは座つて、横の鐘をカリンとたたく。明通寺よりはこのは俗寺だ。道端に螢草が今を盛りと咲いてはいた。記念に採ろうと思ったら、多久志は今度持ってきてやるからと言う。あれから一カ月楽しみに待っているがまだ持ってきてくれない。

次は神宮寺だ。ここは奈良のお水取りの水を送る若狭井のあるお寺だ。神仏合体時代の重文で、男神女神を祀った文字通りの神宮寺であった。この拝観者は、東京から来た女子大生二人と私らだった。本堂へ上る時、先きに上った件の二人は、私らの為に、ジャパニーズスリッパ(藁草履)を箱から出して揃えてくれたのには感激した。男の学生に混つて、ゲバ棒を振る学生もあるかと思うと、些細な親切で人を喜ばせ、文化財の研究に二日も三日も泊りこんでいる若い人のあるのを、如実に見た時、今日の日本の表裏を、まざまざと知った感じであった。

案内の僧の、もの言いと態度が、中学時代に習った体操の先生そっくりで、薙刀を持たせて高下駄を履かすと良く似合うだろうと相

像しながら、いつの間にか降り出した、霧雨に煙る前庭の広い芝生の上へ下りていた。

この他、羽賀寺、妙楽寺、姫彦社等とまだまだあるが、今日はこれまでと、駅前通りの喫茶店、クロンボでとりあえず、コーヒーをのむことにして車を捨てた。

思うと、どのお寺も、参観料は五十円均一であった。京都、奈良のあこぎな参観料と思

川柳塔社

役員新陣容

— 川柳塔社常任理事会 —

十月三日の同人総会で報告することになったが、この新陣容は事後承諾ということでご承認をいただくことになりました。総会当日は夕刻から二賞発表などで時間的制限をうけるなど、かといって二日間にとつたことはムリなので、この点で諒承を得たいとおもいます。

九月四日六時から本社階上で常任理事会が開かれました。この日は、二賞決定の日でもあり、役員新陣容の推薦などで出席者はタバコをすうヒマもないほどでした。

生々庵主幹が公私ともに忙しく、それを補佐するため副主幹二名と理事長や、諸役員を別表のようにきめました。

川柳塔の今までは、やや守勢型のきらいが

い比べて純朴なお寺と共に、派手な宣伝のしない昔ながらの白壁土蔵のある、小浜市を發ち去りかねる心で、雲浜先生の銅像を見上げていた。川柳文学の堀口塊人氏は当地の出身ときいてゐる。

四時十九分小浜発敦賀行に乗車した一同の鞆は、名産笹漬と蒲鉾でふくれ上つていた。敦賀発六時九分の雷鳥四号に乗った時は、

ありました、ここに敢然、イメージ・チェンジすることになりました。多士セイセイの川柳塔です。やってやれないことはないはず

川村好郎氏は入院中、若本多久志氏は上京中、菊沢小松園氏は近県川柳大会出席のため竹原へ、というわけで欠席しました。

二賞決定には、毎年熱氣をはらみます。十二冊の雑誌から六作品をえらぶので選考委員は汗だくでした。

「疲れるなあ」そんな声もれます。

川柳塔賞の選考は三氏とも出席しましたが路路賞は生々庵主幹と葉氏、水客氏で長時間の協議がつきました。

出席者：戸田古方・橋高薫風・河井庸佑・正水水客・中島生々庵・大坂形水・西尾葉・阿万万的・金井文秋・不二田一三夫諸氏。

主 幹

中島生々庵

副主幹

同 同

北川 春巢
西尾 葉

誰も句会のことはおろかも言わぬ程疲れていた。ひとり小松園だけが隣りに座った婦人と、手振り面白く話しているのが、後の席から見えていた。

八時七分無事大阪駅に着いて、目出度く解散したが、それから一週間程して、一杯を嗜むむ好郎から、笹漬の味が酒とマッチする旨さの電話があった。

理事長

若本多久志

副理事長

川村好郎

同 同

菊沢小松園

同 同

正水水客

同 同

橋高薫風

同 同

大坂形水

同 同

傍島静馬

同 同

吉田圭井堂

同 同

尼緑之助

同 同

伊藤茶仏

同 同

市井三林坊

同 同

岡村久志良

同 同

河村日満

同 同

工藤甲吉

同 同

小西無鬼

同 同

高橋操子

同 同

中筋三幸

同 同

八木摩太郎

同同同同同同同同 同同同同同同同同 常任理事 同同同同同同同同

事 ★

★

會計部長
句會部長
企畫部長
句會副部長

新岡 山内 池田 岡垣 藤井 築山 直原 本田 浜田
岡内 静古 田方 祥明 快夢 七面 惠二 久米
回天 水心 大月 朗朗 朗朗 朗朗 朗朗 雄

句會部 庶務

編集部

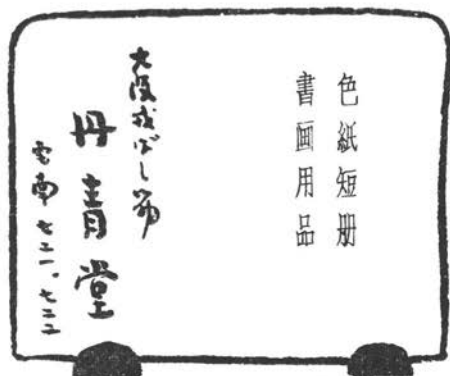
★

★

有信 高杉 村田 城川 中川 西井 河井 小金 児島 西田 菊田
新之助 鬼瓢太 舟雀二 佑明秋 与呂志 柳宏子 いさむ
(太字は新加入)
小谷 不二 谷垣 有信 児島 金井 戸高 橘高
葉子 一三夫 史好 新之助 与呂志 文秋 古方 薫風
藤岡 山本 川口 竹松 岸南 清水 奥弘 保朗

近作選者予定 ★

同人吟選者予定 ★



菊川 北村 若西 中島 江河 谷香
沢村 好春 本尾 島生 城內 垣川
小松 園郎 多 久 柴 修 史 醉
園 郎 久 柴 史 笑 々

川柳五十三次 (十三)

富士野鞍馬

大井川人の継穂の出来る所亀江(二六〇28)
大井川首は神とも仏とも 鼻山(二二16)
霸王樹(さばてん)といふ身で越える大井川

醜郎(二四八22)

首ばかりいくつ流れる大井川

鈴山(七五29)

尻つべたびつしより九十四文出し

普子(八一21)

九十文取られて濡らす尻つべた

三箱(二五九9)

大井川六文だけは首が見え 夢中(五七20)

百とると首がないから川を留め(二四15)

と、川柳も肩車渡しを詠みまた、

有ツたけ御駕へたかる九十川 古糸(七五2)

夢心地目を閉じて越す大井川 佃(二一四5)

蓮台ですねおしを 大井川 我柳(二二二5)

現世でも蓮台に乗る大井川 (六七19)

と蓮台渡しも詠んでいる。

両岸には「川会所」という役所があつて、

水が肩を越せば徒渉を許さなかった。それが

「川留」である。

川留といえは「朝顔日記」の深雪を思うで

あるう。その旧跡というのが今でも島田にあ

る。川留となれば、大名といえどもどうにも

ならなかった。

大名をおつつくねとく川支え

問々(一九五10)

23 島田

藤枝から二里八町(八・七キロ) 島田は、大井川の東岸で、ここまでが駿河である。

駿河から遠江までかたくるま (二一17)

「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川」とうたわれ、この川越しは難儀であつた。

一九の「藤栗毛」に

「大井川の手前なる嶋田の駅にいたりけるに、川越ども出むかひて「だんなしゆ川アたのんます」「きさま川ごしか、ふたりいくらで越す」「ハイ今朝がけにあいた川だんで、かたくまじやアあぶない、蓮台でやらずに、おふたりで八百下さいませ」「とほうもねへ、越後新潟じやアあんめへし、八百よこせもすさまじい。」

とあるように、川越人足がふきかけたのであるが、蓮台の渡し賃は、問屋では二人で四百八十文といっている。
享保二十一年(一七三六)の、川越賃規定は、

- 一 平水帯通 四十八文
- 一 乳下水 七十文位
- 一 乳上水 八十文
- 一 脇水 九十文より百文迄

肩を越候得は歩行越難儀に付川留といふことになつていた。大体肩車、背負等で渡したものである。蓮台というのは、板張に二本の棒をつけて四人で担いだのである。

大井川いざりがあるくように見え

春風(八〇21)

川越しはとんぼのつるむ気味があり

(拾二5)

大名も別に知恵なし川づかへ

佃 (二五三二)

島田にも金谷にも武者五六千

(二三六)

きついしけ田をも谷をも人で埋め

石弁 (宮初30)

きついしけ島田金谷は人だらけ

素鳥 (傍三三六)

乗掛た馬に島田も川支へ

鄙人 (二四〇一七)

人ませば水ます駿河遠江

雨夕 (三三三)

水増せば人増す島田金谷宿

麴丸 (一三六三)

駿河様遠江様ごたいくつ

樹水 (傍四一八)

近 詠

須坂市 高峰 柳 児

帰省して荒れた菩提寺導かれ

曲折の果てエリートコース遠ざかり

みじめにも煙たがられる天下り

上田市 金子 呑 風

どこえとも言わず和服で社長出る

レコードで列車を送る温泉場駅

再婚をすすめて父と別居する

大洲市 米 沢 曉 明

墨審が応援もする草野球

ふるさとはまだ電線へつばめ来る

了解は裏でできてる陳情書

川とめてにはを直す旅日記 (八八)

あくびの中の川巾が一里なり 狐声 (二四一)

駿遠にあくびをさせるきつい降り (八二五)

駿遠に欠伸をためる五月雨 佃 (二三二五)

川止メの間太夫も麦をつき (初一九)

そして減水して川が明くと、

ごふはらさくとき落せば川が明き

(二八三五)

川明は宇治の合戦ほどに見え玉章 (三六六)

不二の雪消て島田も解かり雨且 (五七五)

川明は宿屋の囲碁も総々金魚 (一六七三)

和歌山市 秋月 宏 方

身に覚えあることばかり子を叱り

白髪など抜いたあの頃若かった

岐阜市 市 川 鱗 魚

詩集繰る指だよ爪を染め給え

母の子の初心小さな金を積み

今治市 長 野 文 庫

後続があわてるアメリカのターン

割勘の不運が世話人へ皺よせ

何かになった無駄な無の積み重ね

小松市 山 上 千 太 郎

鳥居の上に目のとどかない苔がむし

土動くように蟻のむれ狼狽

安心をさせる嘘なら乗ってやる

川の口明たところかまでたたき (拾二三)

と両方からドツと渡ったのである。

なぜこんな不便な川越であったかというと

これは幕府の政策であったのである。

この宿の遊女の髪風から「島田髷」という

のが起ったといわれている。また旅館の混雑

を、

「島田金谷のはたごやの下女が、なます盛

るとてちよこ出したとさ

という小唄がうたわれている。

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

西尾 栞

むき出しの刺をサボテン愛される

都 倉 求 芽

サボテンに凝つてるといふ話をきく。たまに咲く可愛い花を愛して、サボテンの鉢を並べておるのではないだろう。この句のように、むき出しの刺を愛してであろう。こんな性格を愛されてる人のあるのが思い出される。

呑んべえに移いだ娘等の父飲まず

金 井 文 秋

こういうことはよくあることだ、之を皮肉な世の中だという。飲めない父が、可愛い娘の婿殿の呑んべえ姿を、目を細めてサイダーでつき合っている好々爺の文秋さんの姿が目につかぶ、又この反対もある。それは私の場合である。

一年分の声聞き貯める手の温味

堀 江 正 朗

戦前の堀江さんに会えば、誰でも先ず握手する。毎年の路郎忌には出雲から四〇〇軒の道を遠しとせず必ず出席されるその誠実さには頭が下がる。視覚を失われた正朗さんは、聴覚と握手で、一年間の友情を温かく交わされるのである。

女事務恋の受話器を手で包み

浅 野 芳 朗

句想は古いが、恋の受話器を手で包みは仲々良い表現である、最近のO・Lのあつかいさにひきかえて、この事務員のおくゆかし心と姿が察せられる。

いつまでも女でいたい花を活け

小 野 克 枝

八面六臂の働きをしておられる作者を知っている者には、愈々この句が味わえる。矢張り女心の詠えるという良き句である。

二番目を走って避ける風当り

志 賀 木 石

当り障りのない、所謂世渡りの利口さを、二番目を走ってとは旨く詠まれている。之で無事停年まで勤められて、余生を悠々自適されることになる。

かかるとき嘘にも女すくわれる

小 出 智 子

かかるときと具体的に言われていないが女心を遺憾なく表現されている。嘘でも良いからとは女からよくきく言葉だが、女心とはせつない、やるせないものである。

おしゃべりのかたまりのまま娘らは下車

増 田 次 章

こんな情景は、しばしば見つけるが、かたまりのままとは上手な言葉である。下りるときだけでも、黙って下りたらよさそうなのだが、今も昔も姦しいという字は生きている。

京の庭みな善人にして帰えし

宮 西 弥 生

喧騒と不快感とスモッグのいらいらを、京都の、わびと落ち着きのある古寺の庭に心ゆく迄ひたつて、そのいらいらを解消して、性は善なりの元の善人になって帰って来たという、おそらく実感であろう、みな善人にして帰えしのみが大変よく、帰って来でなく、帰えしという擬人法も亦よく効いている。

近作柳櫛

秀句鑑賞

—前月号から—

菊沢小松園

棘のある花にも愛は惜みなく

木村 弥栄子

毒は薬に利用される棘のある花は美しい、棘を承知で激ぐ愛は純粋だ、雑念捨ててこそ炎ゆる愛情が湧く、余情掬すべし。

善人のふところで小銭のやすらぎ

嘉数 千代香

インフレ傾向の昨今、デノミネーションでもない限り小銭の安住地は無い、世相をよく捕えた鋭いところを敬服する。

哺乳瓶いつか断絶の子に育て

河原林 比呂路

愛一筋の親は予期せぬ儘に子は断絶の日へ育ってゆく、その仄かな陰影は或いは哺乳瓶の時から已でに初まっているのでは無いか、冷酷な現実の長い経過をよく簡潔に纏めていられる。

建売りの何処にも母の居場所ない

村井 城南

此処にも冷たい断絶の匂うドラマがある。念願叶ってやっと手に入れた新しい家、資本主義から喰み出した小さな家に、老いた母の座わる場所まで無い、考えて居ない訳ではないがその余裕がなかったのだ、ここにも政治の貧困は悲劇に通ずる。

ガクの無い不運笑顔でカバーする

西本 保夫

ガクの無いとは大学を出ていない意味だろう、昔は中学を出たらもう所謂ガクの無い方へは入らなかつた、学問の氾濫は大学を出なければ水平線以下で片附けられる。そして巷に大学出の常識のないワカラズ屋を儲らえたことも事実である。この作者の一連の平社員をテーマにした川柳の執念にはいつも注意と感心で見ている。この句もその流れの一句であるう。常識のある温厚な人柄も窺えて快よく共感を呼ぶ句だとおもう。

釣り好きの食わせる餌は惜しからず

高野 不二

人間の気儘に我には許せの勝手な哲学がある。取られたと言わずに食わせたところにこの句の面白さがあり釣り好きの面目も躍如たるものがある、こうした余裕があつたこそ釣も楽しい。

還暦のすんだのもいる花四天

堀口 欣一

雀百まで好きな道は熄められず、科白のない役ばかりで半生を送った、皺ツ面を白粉で塗り塗りつぶして若い者と一緒に、還暦を過ぎてはまだヤアヤアだけの花四天、意地やうつてするような人生の哀感がひしひしと胸を搏つ。

逆らえば竹はピシリとはねかえり

生信 笑子

飲み込んで居た對手から予期せぬ逆襲に老魅も慌てることがある。第三者からは面白いこともかも知れないが、当事者は大変な引込みの悪るいことである。強い竹の習性を利用して若い人の強硬さを見せられた意気を壮とする若い女性としては力強い句である。

美しいでしようと孔雀のよい構え

竹崎 寛

美しいものへの素直な憧れ、何の抵抗もななく眺められる人は倅せである。境遇により、地位によりいつも皮肉に観、皮相な観察、己れ自身が事実と煙に自らを閉じ込めても、決して倅せではあり得ない、譬え背伸ばした美しさであっても一応その儘眺められる処に反つて人物の大きさと慧いがあるのではあるまいか

紙面の都合で割愛した句

探せばまだ何処かに仁義礼智信

岡本 まさひろ

台所の隅で唄の子が育ち 藤本 恵子

川柳雑誌・番傘・ふあうすと・川柳塔

4誌の創刊号

不二田二三夫

四畳半のボクの部屋は紙屑と糞本の山だ。
そのゴミゴミした中に「川柳雑誌」が九八冊と「川柳塔」が七三冊、合本にして十六冊が古い本箱におさまっている。

ふり返ってみると、もう十四、五年も柳誌のゲラをにらんできたわけだ。

40年10月「川柳塔」の創刊号で、生々庵主幹は、

川柳塔社が産まれた。実はまだ哺育室で静かに生活を送っている未熟児である。

と、主幹の人柄がうかがわれる謙虚なる創刊号のコトバである。(66ページで出発した)

川柳塔の母体である「川柳雑誌」は大正13年2月15日発行で創刊した。(一部三十銭)

麻生路郎主幹は扉で、

現代人の思想にびったりと触れた詩と云えば川柳の外にはない。我等はこの川柳によって人生を的確に批評していきたいと思っている。

そして、三段組み四ページにわたって「誤れる川柳観を排す」と題して、前略「私達が「川柳雑誌」を発刊することになりました主

たる原因は世間の人達に真実の川柳を知っていただきたいからであります。私達は私達の知っているだけのものをぶちまけて諸君の川柳研究の水先案内をつとめたいと思っております。

従来の川柳雑誌は申し合わせたように初心者に不親切でありました。それは自分達の研究に忙がしかったのにもよりまじようが、初心者を導いたり、世間から誤解されている川柳を釈明するために用いるだけの紙面を持たなかったのにもよるでしょう。私達はそうした点を特に、この「川柳雑誌」で補って行きたいと思っております。

と、川柳の社会化運動の意欲があふれている。A5版28ページに広告が四ページ。同人24名に支部が10というガッチリ固めた陣容である。同人中に岩崎柳路、高橋かほる、橋本二柳子(緑雨)諸氏の名が見える。

課題吟「仲人」井上剣花坊選「花輪」岸本水府選。「近作柳樽」の一句組に霞乃先生の尊父声村氏や、一句組の一番ビリに石川、白柳とあるのはいうまでもない清水白柳氏だ。「番傘」の創刊号は大正2年1月15日発行。

ご承知の横とのだが、旧「川柳雑誌」の半分の大きさだ。表紙の四に

「こんなものを出すことにした。ト 百。発行兼編集人は岸本竜郎(水府)となっているが、「偶感」と題して当百氏が、東京人と大阪人の気風の差は、その気候の相違にあると書き出して、

東京の句の変化動揺の是非は暫く措く、大阪の句の平静は或は停滞とも見えよう。けれども我らは斯く信じている。大阪の句は恒心のある執着心の強い句で、決して他の誘惑にも迷わぬ、軽々しく動揺もしない地味な態度が淋しく見えようとも、進歩の度がヨシ遅々たるものであるうとも、一歩一歩基礎を固めて進みつつある今日のやり方は、わが大阪の気風に合致した最良の方法であると、かくして我々は大阪において大いに大阪を咏わんとするのである。

と、大阪柳界の旗手たらんとする気がいのようなものが見えるようである。

「上欄屋」という題で当百氏の句が五句ならんでいて、そのトップに有名な、

上欄屋ヘイ／＼と逆らわす
がある。五葉、半文銭、蚊象、水府諸氏の同題の句がずらりならんでいる。

末尾に「規」として「番傘」は二カ月に一度出すやら一カ月に二度出すやらそこはハッキリせず。気の向いた時に出す。「番傘」は川柳家に進呈する雑誌なり。その代り郵税(二銭)だけはお負担あれ。「番傘」に寄付金でもしてやろうとの特志家があれば

喜んでお受けをする。
とある。

「ふあうすと」の創刊号は昭和四年6月15日発行。(一部10銭)
A5版14ページの扉に「同志の人々よ」相

元紋太。
「ふあうすと」が出た。偶然に出た。ほん

とうに偶然です。誰が主唱者というでもない。誰もが発起人だという方が似合っている。思ひが寂しいと思っていたのだ。物足らぬ思いを抱いていたのだ。触れれば落ちようという書き出しで、

中略—それで私は「ふあうすと」の主義を捜してみた。

①柳界の為に奮闘。②川柳の社会浸潤。③川柳を研究のため。④初心者を開発誘導。

などと述べ、最後に、ただ川柳を真つ向に戴いて精進するのみである。それを扶けるのが「ふあうすと」の存在である。とある。

同人18名の中には三条東洋鬼氏(のちに東洋樹)房川素生氏などの名が見える。

関西の柳誌が、関西を圧倒していたのは、右の三誌が、常によい意味でのライバル意識が強かったからであろう。

四誌の諸先生も、自分の子が産まれた時より創刊号が出来た時のほうが感激が大きかったらと思う。

戦前、栗島すみ子の「栗島草紙」や、林長

二郎(長谷川一夫)の「下加茂」などの創刊号は編集助手だったが、ボクの「尖端」や「漫才」「川柳塔」創刊号のときは少し体重が減るほど身心ともに疲れたものである。創刊号を手にした時の感激は、本をこしらえた者でないといわからぬものである。

川柳人とユーモア

中川晃男

「川柳人とユーモア」この最もつき過ぎるような言葉が、実は案外つながらないのである。つまり川柳を作る人がユーモア感覚を持っているには違ひなからうが、気安く話せるユーモラスな人ばかりであるとはいえないからである。

高座から百面相もどきで人を喜ばす落語家も、家に戻ればニコリとみせずオカミサンを叱りとばす例が多いように、川柳作家も至って生真面目で冗談一つおとしやらぬ方がおわすのである。何がそんなにつまらないのかい、この世が面白くないからこそ川柳に救いを求め、他人に対して言えは突き刺さる言葉を川柳に吐き出しているのかも知れないが……。つまり頭でユーモアを解してはいても心では体では、表現できないと云うべきか。

せせこましい勢力争いや、自己満足の名誉欲人間の本能とは申しながら、陰でお互いを警戒・敵視するような事がないとは云えないであらう。本来の目的ははずれて本筋でたついている。何事ぞ花を見る人の長刀」である。ユーモアは人間社会生活の潤滑油。ギスギスしがちな人生の歯車にユーモアを差してなめらかに回転させるのである。ユーモアが心のわだかまりを消散させ、心身の新陳代謝を回り、将来への希望を抱かせようというものである。

年を取るとガンコになる。融通が利かなくなる。ひがみつぽくなる。それがユーモアによって、川柳によって潤いを持たせ、若さを保たせ、そして命を延ばしてくれるのではなからうか。

中島主幹のお株を奪う訳ではないが、精神衛生上金のかからぬ貴重業なのである。

それだから「柳人は老人ばかり」というオチではないが、先ず長生きされる率も多いであらう。

然しユーモアばかりではダラズ(出雲地方の方言で一口言えばバカの意)になるので川柳にはピリリと山椒ならぬ風刺も入れて辛味を我々はよく噛みしめて、兎角この世は住みにくいと嘆じた夏目漱石を見返す位の気概がほしいものである。

——などと、ひと事ではなく自分へ言い聞かす此の頃なのである。

▼河股緑水氏(大阪市同人)は住吉区庭井町一二〇文化住宅B・11へ転居。

時間会

川柳家の暦

(十月生まれの人)

「川柳家の暦」は故白柳さんが数年間この取材に走りまわった力作である。十二月分までノートに書かれてあるので順を追って発表していくが、句は白柳さんが選んだもので作家の代表句という意味ではない。

(編集部)

遺稿 清水白柳

1日	福島正則 T2 癸丑	大阪
1日	先代の看板のまほうどんそば	
1日	桂ひろし T3 甲寅	京都
1日	円い月家出の馬鹿を思うまい	
1日	津守柳信 S7 壬申	大阪
2日	愚痴云わぬ嫁が刺戟のない世帯	
2日	浅川八郎 M34 辛丑	富田林
3日	美容院出てくる女のピエロめき	
3日	小泉婦多葉 M35 壬寅	静岡
3日	奉限無寿限無肺活量のいい男	
3日	北川絢一朗 T5 丙辰	京都
4日	逢えた夜の女が障子しめに立ち	
4日	本田溪花坊 M23 庚寅	大阪
5日	絵かきにもなればと思う日の水さ	
5日	林葵丘 T8 己未	岡山
6日	電報へ庖丁持ったままで出る	
6日	鈴木村颯子 M39 丙午	鳥取
6日	守銭奴へぶつけてやれる金が欲し	
6日	西川安静 M39 丙午	岡山
7日	ヘルメット捨てた飯場の溝つまる	
7日	西森花村 M43 庚戌	大阪
	天と地の間をひよこ駆け廻り	

8日	和田光代 T8 己未	宝塚
8日	庭灯籠銀婚近い日の夫婦	
8日	北山悟郎 T8 己未	大阪
8日	朝寝する家の前だけたまるこみ	
8日	山田良行 T11 壬戌	金沢
9日	下を見て暮せと上にいるつもり	
9日	八尾緑波 T2 癸丑	大阪
10日	怒り燃焼すれば哄笑湧きやます	
10日	西出一栄 M36 癸卯	大阪
10日	胡瓜茄子どっさり漬けて心満つ	
10日	目賀芳月 T4 乙卯	岡山
10日	おしめまで取って男の子を写し	
10日	加賀美四四坊 T10 辛酉	千葉
11日	赤とんぼ小さな悔を残す丘	
11日	萩原竹郎 M28 乙未	群馬
12日	何時からか農家も椅子となる食事	
12日	椎名いろは M42 己酉	神戸
12日	いつからかあなたの胸に棲むいのち	
12日	里嘉矩 T10 辛酉	神戸
13日	バラ色の風船となり炎えつくる	
13日	富士野鞍馬 M28 乙未	東京
	満員のそれぞれの顔みな孤独	

13日	山路閑古 M33 庚子	東京
13日	羽子板の押絵の中に豆絞り	
13日	長宗白鬼 M38 乙巳	東京
14日	もう一人の俺が妓の手を握る	
14日	ウインドの九谷そのまます春になり	
14日	魚住満潮 M39 丙午	小松
15日	稲本凡子 T10 辛酉	大阪
16日	清水汪夕 T12 癸亥	岐阜
17日	堀江芳子 T10 辛酉	島根
18日	一笑に付してはほしくない女	
18日	臼井三坊 T4 乙卯	倉敷
19日	雲の峰動いて誰か死を急ぐ	
19日	常岡孝風 S8 癸酉	兵庫
20日	陽の当る身をうらやまめ風のはは	
20日	西左刀 M31 戊戌	高知
20日	ヨーチンへ二度の涙をふいてやり	
20日	ト部晴美 T13 甲子	神戸
20日	淹れ替えてひとりか惜しい茶のかおり	
20日	大谷月都 T14 乙丑	愛知
20日	道とえば嫁にも欲しい教えよう	
20日	藤川良子 S6 辛未	岡山
21日	からませた指から落ちるものがある	
21日	泉梨花女 M42 己酉	姫路
22日	ふつつかと云うを娘の上につけ	
22日	兵井虎声 S12 丁丑	西宮
22日	マニキュアの赤が女を誇張する	
23日	酒田清子 T1 壬子	大阪
23日	辛抱をこぶしの中に握りしめ(九月急逝)	
24日	河井庸佑 S4 己巳	大阪
	運動会わが子ばかりを追うカメラ	

25日 川村 好郎 M35 壬寅 高石
道問えば女一足あとへ寄り
25日 野村 運平 M44 辛亥 松山
能書き程に効けば温泉安いのもの
25日 麻生 アイト T11 壬戌 奈良
朝露の蔽しさに耐ゆ葩の如
26日 岸田 万彩郎 M37 甲辰 大阪
人のよい父へしかりものの母
26日 深尾 吉則 M37 甲辰 大阪
考える人のポーズで植木職
26日 金子 花泉 S6 辛未 足利
鯉二尾夫婦の昼に似て静か
27日 松井 可笑 M35 壬寅 竹原
この時で云わんロレッツが廻らない
27日 瀬田 美知 T1 壬子 宿毛

27日 奥谷 弘朗 T5 丙辰 倉吉
そろす目がもう苦しみに負けている
27日 山内 房子 T8 己未 竹原
魂のよすが日本に伊勢がある
27日 たまさか 止水 T12 癸亥 弓削
たまさかに来た嫁じつとしておらず
27日 小言とも 知らず 奥へよい返事
27日 田和 三生子 S12 丁丑 和歌山
救急車露けき夜をまっしぐらに
28日 小出 智子 T15 丙寅 大阪
靴揃え愛も隋性の日が続き
28日 谷川 醉仙 S12 丁丑 弓削
靴揃え愛も隋性の日が続き
28日 内藤 幸子 S5 庚午 和歌山
云い訳を考え米屋持つてくる
29日 岩井 三窓 T10 辛酉 豊中

29日 河野 君子 T11 壬戌 大阪
綴方貧しき父は母を打つ
29日 老夫婦 縦に並ぶ歩乱さない
30日 小宮山 雅登 T6 丁巳 静岡
山脈は雪子 はうつくしく寝たい
30日 太田 山里 T10 辛酉 高知
する気なら出来るへそくりしない妻
31日 伊藤 秋星 T1 壬子 京都
刺りあとも空の青さも僕のもの
31日 延永 忠美 T2 癸丑 岡山
天平の力みななる指の先
31日 津守 市子 S5 庚午 大阪
何気なくながめた足に爪が伸び
（★有名柳人が脱落している月もあり、白柳
さんいまは云く、この点ご諒承のほどを）

ハイウエイ

高鷲亜鈍

ハイウエイと関係のない花電車
地域開発鎮守の森もとりに去られ
バラボラに太くて固いものを期す
土堤にコンベアが敷設され
猛然と突っこんでく花電車
子の大きな手足に親は小さいもので
よし
番犬に生れかわって飯に汁

ヤアヤアと三十年ぶりの握手
三十の嫁かず後家が挨拶に
ポッポッポ連絡船の毛布で横に
旅疲れコクリコクリと昼に眠る
月面の白骨化は潔し
雲の上にのりたし海にかえりたし
鏡の中の僕居なくとも僕はあ
色深し金も力もないめくら
ハッパニングの刃物に怖いものなし
同情をさらい憎まれ口を叩くぼく
年を経るごとに地球回転早くなる
詩を忘れ常住坐臥に驚かず
生命燃やせば光るもの見えるもの

ショッピング・ゾーン

梅田 一番地

楽しいショッピングと
いこいこ
百貨店



大阪梅田・本町三丁目
阪神
電話 345-1311 代

奇 術

村田 瓢太選

療養の成果奇術とヘボ将棋 杜月
 総会は奇術を見たい過半数 木魚
 奇術も向かぬわが手をじっと見る 百酒
 花・鳩とつづく奇術に目がくらみ 祥月
 種あかし女をはだかにするような 白江
 奇術師の腕にかかれば不死身の娘 代仕男
 臍くりを奇術のように妻は出し 露杖
 奇術にも時代の流れ目に映じ 双楽
 奇術より助手の美貌に見惚れてる 本蔭樺
 敬老会・素人奇術に手を握り 翁童
 とうやうの奇術チヨイチヨイが見え 静少
 その奇術見破る裏をかく奇術 梁水
 ニツコリと出て来た美女にホットも 信二
 素人は奇術の種を見せたがり 南奉
 奇術やりそれから面白い人にされ 鎮也
 熟練のいるのは奇術師タネ教え 弘
 奇術ではないが月から声が来る 十郎
 奇術まで上手になつて嫁さおくれ 英子
 パーティの奇術素人らしき受け いわを
 奇術の鳩大空を飛ぶ夢を見る どんたく

子の奇術助言があつて無事終り 曉童
 見えてるぞの野次も一興アマ奇術 章雅
 奇術でも種が要るぞと無謀責め 誓二
 子の奇術タネは知つて知らぬ顔 秋月
 チビツ子の奇術をはめる審査席 悠泉
 惜しみなき拍手も素晴らしい奇術 七面山
 元スリの実演奇術のように見せ 敬一
 奇術師の自信お客を立ち合わせ 代仕男
 取出され鳩羽ばたきをやつて見せ 信二
 得心をさせて煙にまく奇術 敬一
 奇術師にばカードも生きて見え 軒太楼
 佳
 客席は金魚奇術の池となる 誓二
 奇術師のこんなところにもボケッ カズエ
 喝采を忘れて奇術障がない 千翁
 奇術師の帽子が欲しい子供の目 カズエ
 失敗と見せて奇術の名演技 春日
 人
 たね全部見える楽しみ子の手品 静泉
 地
 自動ドア明治の目には奇術めき 英子
 天
 天勝に酔いし幼き日の記憶 どんたく
 軸
 本番であがり手品の種がばれ

黙 否 権

小林孤呂二選

黙否権また先生を困らせる 恵子
 共犯にされて口惜しい黙否権 利美
 面会の母へも黙否押し通し 曉風
 心では泣いております黙否権 祥月
 家中が冷えこむ妻の黙否権 白汀
 黙否権いずればしれる身の運命 露杖
 ありの儘に話をしない黙否権 いわを
 黙否権何がお気に召さぬやら 古心
 おしゃべりが黙否権とらからう 静泉
 お人好しとても出来ない黙否権 弘朗
 差し入れはペロリと食つた黙否権 曉童
 ふんざりが付かず黙否で時かせき 章雅
 言い負けた方から使う黙否権 扇水
 黙否権崩す一輪差しの花 千翁
 黙否権腹が鳴つても負けられず 軒太楼
 制服の倫理が黙否権使う 止水
 殴るのを待っているような黙否権 どんたく
 黙否権壁と話しているみたい 代仕男
 核心に触れて黙否をされつけ 洋々
 倦怠期かわりばんこの黙否権 曉明

人生を嘘で行くより黙否権 藤持
真づけがとれたと知らぬ黙否権 カズエ

黙否権 教えてくれた黙否権 翁童
黙否権 があり容疑者慌てない 緑水

黙否権 母はすっかり知っており 信二
黙否権 刑事の煙草へるばかり 城南

黙否権 不利な立場へ追いこまれ 佳女
黙否権 悲しい過去はもう云わぬ 南奉

黙否権 西瓜もたべに下りてこぬ 木魚
拷問にかけてやりたい黙否権 春日

黙否権 見えない糸が引いている 新之助
黙否権 間かず語らず飯場の灯 悠泉

佳
黙否権 ビエロの父を見し日より 千代香
ペン先の動きを止めた黙否権 一治

この兎にも友情があり黙否権 梁水
味方にも敵にもなれず黙否権 鬼焼

黙否権 それにも限度あるを知り 七面山
人

大きい奴は拒否権小いには黙否権 古方
地

黙否権 言えは悲しむだけだから 素身郎
天

太陽を真つ黒に塗り黙否権 千代香
軸

黙否権 白と信じている強さ

ビ ジ ョ ン

森田 茗人 選

ビジョン抱く目の色清く澄んでも 白汀
恋語るビジョンに遠く揚火火 古心

将来のビジョンが浮かぶ掛布団 道雄
子のビジョン明治の母へピンと来ず カズエ

ビジョンのみ追う若者を不安がり 綾女
ビジョンの差互に相手をあざ笑い 百酒

女房が先ず反対をするビジョン 曉童
実現に遠いビジョンを練ってみる 祥月

育つ子の夫婦のビジョン食い違い 佳女
老妻も女おんなのビジョン秘め 千代香

ホラ吹いてビジョン疲ら顔になり 静歩
若者のビジョンいささか勝手すぎ 智司

庶民には縁ないビジョン並べたて 弘朗
借家から脱皮する案今日も練り 静泉

未来図を決める朱を入れ墨を入れ 千翁
ささやかなビジョンは夫婦で決め 保夫

ビジョンには遠く都会の隅で生き 恵子
倦怠期夫婦でんでにビジョン抱く 洋々

平社員はビジョン隅つに放つとかれ 重人

金になつてビジョンも行き詰まり どれたく
ハイミスのあり小さくなるビジョン 暁風

ビジョンぶちこわす三人目も女 素身郎
初孫に父子二代の夢托す 露杖

女房のビジョンへ強いて逆らわず 本蔭棒
ビジョンと違う女房が手こずらせ 鎮也

定年になつてもビジョン追い続け 久司
借金で建てるビジョンを羨まれ 悠泉

公害のおまりついていたビジョン 信二
石橋を叩いてビジョンこきおろし 誓二

幻影を追うて明日へ持つ希望 七面山
佳

公害もビジョンもまに過疎に生き 英子
エリートはビジョン黙つて歯を磨く 里風

素晴らしいビジョン画いこまで老い 扇水
へそくりへ小々なビジョンあたる 梁水

親馬鹿のビジョン狂わすオール3 西合
人

子にきたビジョンばやけて来た便り 十郎
地

ささやかなビジョンその一過疎で老い 和宏
天

ビジョン追う心は老いず夕焼ける 春海
軸

結局は夫婦のビジョン帰一する

初歩教室

— 題「秀」 —

本田恵二朗

微笑句と私が勝手に名付けている句を、九月号の川柳塔欄から、ピックアップして、皆さんに、その良さと、その味とを再確認して頂き、大いに見習って頂きたい。こんな句を、どしどしと生み出せるようになると、身心共に明朗になって健康増進と商売繁盛の源泉となるにちがいないと思う。いや本当だよ悲しみに沈んでいても髪かのび 水 客
大笑したいがひとりでではできず 久米雄
トタン屋根玉子焼でも出来そうな 正 朗
段違い平行棒だね ノミ夫婦 一 三天
非常口こんなはしこは降りられず 操 子
サンキューじや礼を云われた気になれず 阿 茶
鶏ずらり並んで味気なき産卵 緑之助
葬儀社の声ときばきと棺が出る どんたく
向き合つた蛙の形でこ挨拶 娘句楽
素ツ裸になった途端に客が来る 忠 三

まだまだあるが、これ位にしておこう。屹度ほろ苦くて甘い味を感じられたと思う。

秀才に先祖代々縁遠く

秀才に恵まれずお家ご安泰

美 代

この両句を合わせて割ったら次の如くなったよ。

(秀才に縁なくお家ご安泰)

秀の字の名前ほどにも追いつけず 頼 次

(秀というわが名に恥じることばかり)

秀才も鈍才も同じじでねむり 静 泉

(秀才も鈍才も同じ寝息たて)

秀麗な富士に旅情がわく車窓 利 美

(秀麗な富士に旅情をそそられる)

秀麗眉目全く鶯が鷹を生み 誓 二

(眉目秀麗鶯が鷹を陰の声)

甲子園優秀チームの勢揃い シ ゲ

(優秀なくつわ並べた甲子園)

老松の緑もそ濃く秀いでたる 静 観 堂

(群樹を引き連れて老松秀いで立つ)

秀才を強調してるお仲間 重 人

(秀才ですハンサムですと仲人口)

一芸に秀で会社に巾きかせ 双 葉

(一芸に秀いで社内ノスターです)

秀才をあごて使うてる落第生 千 夏

(大器晩成秀才をあごで使い)

秀才に育てて母にのこる悔い カズエ

(秀才のはまれが母へ高過ぎる)

勉強はさっぱり体育だけ秀れ 保 夫
(通信簿体育だけが秀だった)

閑秀のアトリエらしいオーデコロン まさひろ

(アトリエにこもる閑秀という香り)

秀才と阿呆の程度は紙一重 濁 水

(秀才と言われ阿呆だとも言われ)

エリートも秀才ばかりとは限られず 久 子

(エリートも秀才才型と七光型)

優秀な作品世に残り 隼 人

(名工の秀作三百年を生き)

卒業式優秀学生未来あり 秀 村

(優秀賞未来へ太鼓判押しされ)

秀才のあせり汚職につけこまれ 比呂路

(秀才のあせり汚職に曝かれ)

優秀な手腕も未だむくわれず 比呂路

(優秀な手腕の買い手が現われず)

期待された秀才晩成に追い抜かれ 繁 子

(秀才だったが俺より先に土になり)

勿体なや秀でた眉にサンガラス 敏

秀才の論理不文律に負け 満津子

学歴は優秀世渡りは下手くそ 止 水

秀才の父に似たのは背丈だけ 藤 持

秀才が宿借り弟が家を継ぎ 茂 美

秀才とさわがれ未だ時を得ず 三十四

品評会秀の大根妻に似る 軒太楼

秀才と名付けたがやつぱり蛙の子 つとむ

秀才と才媛ばかりが式を挙げ 西 合

秀才と才媛ばかりが式を挙げ 度 彦

大 萬 川 柳

「差 別」

入選発表

部屋代の差はテレビまで色を変え
大 阪 形 水
人事課として当然の差別つけ
今 治 宵 明
日蔭の身焼香にも白い目意識する
大 阪 誓 二
親類も本妻の方の肩をもち
米 子 瑞 枝
娘を叱り嫁には笑顔だけを見せ
倉 敷 梁 水
義理の子を立てねばならぬ日
大 阪 新之助
女用のジュースも積みバスが出る
大 阪 小 路
受付の態度に差別意識する
大 阪 生 仏
人権を重んじ敬語が乱れて来
大 阪 緑 水
差別されそれから金を貯めはじめ
鳥 取 露 杖
包丁が外れて西瓜にある差別

選 者 中島生々庵
投句総数 五百二十句
入 選 七十四句

大 阪 比呂路
逆立つも彼との差別ちぢまない

吳 英 詩
長く出来る方へも特訓差別せず

大 阪 敏
差別するつもりはないと寄付を

笠 岡 忠 三
偶然の結果でしたと云う差別

大 阪 柳 志
実力とコネの差停年までつきま

界 真 紗 子
二級酒の酔いに差別のない屋台

大 阪 一 栄
顧客先差別をつけたお中元

松 原 重 人
大中小鰻は知らぬ差別され

大 阪 洋 敏
両親の語らぬ差別膚で知り

岡 山 葵 丘
刺青が差別へすむ肌をぬぎ

平 田 代 男
差別への抗議焼身いたまし

西 宮 百 酒
飾り場の差別を甘受して造花

岡 山 久 米 雄
差別したことから荒れる子沢山

岐阜 鱗 魚
屋上の風稼ぐ人遊ぶ人

鳥 取 佳 女
自分から差別を感じている弱気

東 大 阪 三 十 四
意地悪な差別根生ではね返し

豊 中 古 方
これを業と云うのかも知れぬ差別

大 阪 章 雅
死んでからの差別は閻魔に

倉 敷 扇 水
肩書に差別をされて立つ花環

大 阪 一 三 夫
愛隣地区そんな差別へ石を投げ

笠 岡 遠 二
差別するには相手が強すぎる

笠 岡 真 奇
人間を差別する気の床柱

笠 岡 真 奇
戒名になっても差別つきまとい

笠 岡 真 奇
母の膝こは差別のないところ

神 戸 どん たく
差別などする筈ないとする差別

和 歌 山 葵 水
グリーン車に眠むる優越感の顔

和 歌 山 葵 水
差別なき拍手敗者へ甲子園

門 真 鉄 児
弟は兄のおふるへ抗議する

倉 敷 筒 子
己れの非力認めず差別だと信じ

大 田 軒 太 楼
差別にも馴れて二号の子が強く

大 田 軒 太 楼
結局は差別した子の世話になり

大 田 軒 太 楼
差別される理由は胸に聞いてみな

大 田 軒 太 楼
団体は裏口の方へ案内され

大 田 軒 太 楼
晩酌の父へ一品多い膳

大 田 軒 太 楼
握らせたチップそろそろ効きは

大 田 軒 太 楼
偏愛に末っ子せまい呼吸する

大 田 軒 太 楼
母校への寄付まざまざと出世の差

大 田 軒 太 楼
差別した顔でマダムがよく笑い

大 田 軒 太 楼
大ジョッキ女差別をはね返し

大 田 軒 太 楼
村八分にされ発奮をした出世

大 田 軒 太 楼
差別なく育てた子にも出来不出来

大 田 軒 太 楼
差別された同士今夜も飲んでいる

大 田 軒 太 楼
金高がどう差別する祈禱料

大 田 軒 太 楼
コネのある奴は椅子がまわって来

差別ない笑顔ベッドへ撒く白衣
販売機どなた様にも差別なし
身障者差別の壁を乗り越える

貧富の差養老院までついてゆき
自動ドア貧富の差別なく開き
これからは男の時間と帰られ

佳句

岡山 葵丘
女工哀史差別に泣いた日の日記

尼崎 利美
同権の筈に夫の判が要り

岡山 止水
札束で差別をされた日の稼ぎ

東大阪 弥生
見栄捨てし露路の生活でさえ差別

富田 祥美 代
風鈴の値段は差別の音を出し
人の句

鳥取 洋々
差別する方も同んじ過去を持ち
地の句

大阪 一栄
義理の子へ世間が差別つけたがり
天の句

倉敷 梁水
私だけ叱ってくれぬ日の不満

富田 祥美
ベストテン(九月現在)

一花 梢
二 千代
三 文秋
四 真紗子

十六、〇 富田 祥美
十五、〇 米子
十四、五 大阪
十三、五 堺

五 弥生
六 つき子
七 一二三
八 惠二朗
九 木石
十 天笑
十一 どんたく
十二 一三夫
十三 吸江
十四 瑞枝
十五 里風
十六 水客
十七 筒子
十八 一栄
十九 素身郎
二十 静馬

十三、五 東大阪
十三、〇 貝塚
十三、〇 堺
十二、五 倉敷
十二、五 下関
十二、五 堺
十二、五 神戸
十二、五 大阪
十一、五 藤井寺
十一、〇 米子
十一、〇 倉敷
十一、〇 大阪
十、五 倉敷
十、〇 大阪
九、五 倉敷
九、五 高槻

二一 君子
二二 みのり
二三 扇水
二四 圭井堂
二五 止水
二六 鬼代
二七 柳志
二八 柳志

九、五 大阪
九、五 愛媛
九、〇 倉敷
九、〇 堺
八、五 岡山
八、五 富田
八、五 広島
八、五 大阪

以下略

五句以内
十月二十日
締切
第十二回「席順」
本年度最終回 締切十一月二十日
投句先
大阪市南区鰻谷仲之町二〇
川柳塔社 大寓 川柳係

『雅号ぶっちゃけばなし』(85)

なんりゅう



岸南柳

川柳の味、これを知るようになって
た頃は、四十年ほど以前玉造東雲町
に居た当時、西田当さんが、私の居に散髪に来て居ら
れたので何時の間にか、川柳と云うものにとらわれてし
まい、当百さんのとりなしで、南北さんから南柳と名付
けられ、今日に至っております。今の私としましては、
先輩にご迷惑をお掛けせぬようにと心掛けておりますが
やっぱり年のせいですな、八十四歳ともなりますと、物
忘れがひどくて、家族の者達にも笑われております。
四、五年以前、信貴山に地上五尺の句碑を建てましてか
ら、時々お参りに行く時があります。その句碑は「嘆く
まじ努力してこそ生る道」というのです。

(理容所・八十四歳)

八尾菜の花句会 合同松茸狩川柳句会

日時 十月十日(日)
集合 大阪駅午前八時三十分(日帰り)
八時五十五分発 丹波一号車
松茸山もしくは篠山公民館
中食・飲み物付き 一千円
但し交通費自弁、片道二八〇円
外に 急行券 一〇〇円

兼題 松茸・詩・響・錦・哲学・瓢箪
(席題二題当日発表)

帰途は篠山発 大山二号列車。篠山発
十八時八分、大阪着十九時二十二分。

柳 界 展 望

あちらからこちらから
お便りを待っています。

(橋高薫風・担当)

▼麻生霞乃先生から、「お盆も近づいていきますのにいつまでもきびしいことでございます。中略、私の方『青嵐ぬける座敷で長う伸び』の毎日です」

▼宮城県芸術祭参加第二十回東北川柳大会は十月十七日(日)午前十時から日本生命仙台ビル九階ホールで開催。会費五百円(記念品・昼食代)兼題「命・渡りに舟・ひらひら・体臭・甘い汁・バランス・すつきり・限界・うごく。席題三題。投句は九月末まで。

▼岡崎川柳研究社創立川柳「おかざき」発刊二十周年記念大会は九月十九日(日)午前十時から世尊寺松楓閣で開催。

▼第九回三重川柳大会は十月三十一日(日)午後十二

時三十分から近鉄津新町駅裏の洞津会館で開催。雑詠五句(未発表のもの)、兼題「協役・窓・化粧・取消し・責める。席題五題、各題二句、投句は九月末まで。

▼平安川柳社主催の「川柳の日(のつどい)」は九月二十四日(祭)午前十一時から大津市堅田浮御堂で開催。昭和四十六年度文化祭川柳大会並びに第六回川柳文化賞贈呈式は十一月三日(祭)午前十一時から東京都中央区印刷会館で開催。兼題「第一部(出席者)家元・宝石・リボン・笑う・礼装・茄子・異色・役立つ。兼題「第二部(投句者)朗報・別派・塗る・顔役・総立ち・鋸・巻添え・絵葉書。投句は第二部のみを投句料二百五十円(切手)添

えて東京都文京区千石三三五の三田倉寿夫宛。締切十月二十日、各題三句以内。

▼川柳はっかり百号記念川柳大会は九月十九日盛岡駅前北通盛鉄もありおか荘で。▼川柳文学九月号から堀口塊人氏こと柳家徳兵衛翁の「ぼくのはそみち」が連載になった。青森県川柳大会への旅の様子が例の軽妙な筆致で描写されている。

▼川柳わかまつ(小松市)八月句会は海浜吟行として安宅海岸安宅閣趾で開催。▼堺・若芽合同句会は、十月十三日(水)午後六時から八木摩太郎居で。兼題「離れる・消息・マスコット・百姓。

▼備前川柳社、川柳後楽吟社合同吟行は八月二十一日二十二日の両日、三朝温泉西藤館で開催。

▼水郷川柳社四十周年記念第十五回愛媛川柳大会は八月十八日。約百名の盛会。自転車にかけた蜘蛛の果喰えまい。 暁 明 竹割ったような気性で敵もあり 文庫

三界に家なきさだめ妻と 呼ぶ 宵 明 世の無情老醜ひとり酒を 酌む 暁 風 川柳かがみ十月例会は二 日夜池田古心居で。兼題「 祭り・作る・遠い・記念。 十一月兼題は苦手・刈る・ 笑顔・傷手。

▼笑顔・傷手。 月の出に地球の動くのを 覚え 宮口笛生 安全へ使う予算をまた削 り 吉原紅月 満点の家庭何かがものた らず 保西岳詩 生活権わずかに守りたい 都倉求女 雑踏の顔夫々の意志を持 永尾英断 生ぬるいお茶を飲んでは 行吉照路 姑の財布に強い紐がつき 荻野鯨虎狼 新聞が来て郵便が来て誰 も来ず 浜田久米雄 二人の決意は何んにも欲

がらず 山内静水 句集加茂川が八月八日京 都番衆川柳会婦人部から発 行になった。定価五百円。 ハネ・ムーンからピンボ ケをどうしよう 小 弓 たき火する海女の一人の 目鼻だち 頼 江 嫁が来て鯛も鯛もオリーブ 隣 夜昼をさかさまに住む両 久美子 雪の白樺の紅にとけはじ め 友 子 ゆずられた席ゆずり合う 老夫婦 悲しみの上から上へ牡丹 雪 英 子 右のような佳句が多い。

▼山田青船遺句集が六月三十日札幌市北十一条西十八丁目三〇二の四〇六遺句集発行委員会から刊行された。一函館川柳社同人、きやり社人、国鉄同人、岩見沢川柳社主幹と年譜にある。 X写真我が行く先きを又 はばみ 旅へ出た子へ書くことが 多過ぎる。

▼河内川柳研究会は八月十

七日(火)午後六時から八尾市大字弓削府住七二の香川静々居で。兼題全題互選というのが特長。

▼八木摩太郎著「塚つづれ草」が刊行になった。非売品。堺市長・前市長の序がある。塚のあゆみ・塚の歴史・寛保期の塚の細字屋など前著「川柳散歩・塚詩藻集」の姉妹篇。

▼中島生々庵主幹は八月二十八日堺千代の会のメンバーと琵琶湖へ吟行された。

▼尼緑之助氏(出雲同人)から王紫さんの夫君、王阿才氏(五十一歳)が入院二日で長逝され、二十三日葬儀があったとお知らせをうけた。ご冥福を祈ります。

▼本田恵二郎氏(倉敷市同人)の句碑が建てられて一年三カ月、句主は全く知らずにいたという話。倉敷市

新同人紹介

和田 維久子

花梢・摩太郎推薦

のある会社の中庭に勤労青年が建てたのが、「足跡を

残そう砂のある限り」の句碑。青年達が「感動を受けた良い言葉」として見つけたのが、恵二郎氏の句で、川柳と知らず句主も知らずに採用したという。

▼米沢曉明氏(大洲市)は八月二十一日高知の天狗高原にキャン「標高二千上石鎗山登山。」「標高二千上れた足を嬉しがり」

▼東野大八氏(美濃加茂市)は八月八日愛媛川柳柳会に出席、十二日四国の霊剣出石寺へ。山頂からは四国半分が一目で見えるという眺望を楽しんだ。

▼戸田古方氏(豊中同人)は十月二十一日から十一月二十五日までの毎木曜日一時半から豊中公民館講座を担当される。会場は服部会館。

館。

▼吉田圭井堂氏(堺同人)のお孫さんが交通事故に会ったが、一時は心痛そのものにわかれたが頭・両眼その他別条なしと診断されほっとされている。

▼奥谷弘朗氏(倉吉同人)は八月二十一日備前川柳会の吟行先、三朝温泉で一行を迎え、交歓の一夜を過ごされた。倉吉川柳会は目下休業状態である。

▼阿部柳太氏(富田林同人)は長男故進氏の満中陰に、新車を富田林市立青少年センターへ寄贈された。青少年活動に志し自動車好きの故人に因み、なかよし号と命名された。

▼竹中尚二氏(東大阪同人)の敬父が九十一才で亡くなった。謹悼。

▼藤岡花梢さん(富田林同人)は岩田美代さん、木村弥栄子さん、和田維久子さんらと八月十六日金剛山へ。「視界ゼロ山の景色もなんのその花梢」「しっぽりと霧につつまれ姥桜弥栄子」

酒田清子さん急逝

かねて市立桃山病院で療養中だったが九月五日七時半心臓の発作で姉上の句集も見ずに急逝された。西出一栄さんとの姉妹愛は有名である。——合掌——

▼宮西弥生さん(東大阪同人)は八月十七日平湯からお便り。バスの接触事故で軽傷を負われたが、宿のご馳走に元気回復、翌日乗鞍に遊ばれた。

▼福浦勝晴氏(岸和田同人)は七月中旬から身体の調子が崩れ、春木若松町の春木病院二百六号室に入院。心筋硬塞。酒を飲み過ぎても臥たことのない頑健な身体だった自信が崩れた由だが、気よく療養されるよう祈ります。

▼川端柳子さん(岡山同人)は五月十五日バックして来た車に当てられ転倒。打撲だけの診断だったのが一カ月目、岡大、阪大での精密検査で脱臼、骨折、神経切断など重大な結果が判明、以後電気治療、温泉治療を続けておられる。

▼堀江芳子さん(島根県)は退院後自宅で身の回りのことは自分でしておられ、食欲も出て来て順調に回復

八月三十一日米子の八木千代さんご夫妻のお見舞いを受けられ大感激された。

▼出原敬一氏(岡山同人)ははばたき句会を持っておられるが、柳人仲間と寄々相談、よく建設的意見を寄せて下さり、今回も各地同人の希望も多く「川柳塔のバッジ」の公募が実現しました。多数の応募をお願い

します。

▼橘高薫風は八月十九日二十日、名古屋から馬籠・妻籠への木曾路の一人旅を楽しんだ。

太希志さんを

悼む

山川 阿茶

本名平尾猛、九大出の医博、行年五十八才。太希志さんが亡くなったと云う緊急電話を三好先生から頂いた時、突然の事にびっくりしました。

杏林川柳会が中止になってから、お近くにおっても、お眼にかかる機会もなく、昨年一月南区の医師会から万博の見学に行った時お会いしたのが最後でした。その時「糖尿でいけんのです。この間、転んで骨を折って入院しとったんですよ」と云っておられました。太希志さんの岳父は戦前から今の場所に開業しておられ、貧しい人には「よく効く薬だよ」と薬袋にお札を入れてあげられるほど仁術を地でゆかれた方だそうで、その徳をしたって門前市をなすほどよく流行したお医者様でした。

太希志さんも大変忙しく午前中の診察をすませ午後往診、夜間の診察をすませば夜の往診と、時には帰宅が夜の三時、四時になる

と私に話しておられました。糖尿で奈良医大に入院されその後は気のむくままに患者を診ておられたようでした。今度も岳父の一周忌をつとめられたので一度ゆっくり精密検査でもしよう入院されて三日目に脳溢血で亡くなられたそうであります。

口達者揃いの杏林川柳会の中では一番おとなしく大酒なさるわけでもなく言葉数も少なくニコニコと川柳を楽しんでもおられたようでした。「もう一寸時間があればいい句も出来るだろうけれど」とおっしゃってました。又「姓名学上、太希志と云う名はいけんそうで太のをぬいて太希志とすればよくぬける

と云うんですが」と真面目におっしゃった事がありました。今はなつかしい思い出になりました。

ご長男が奈良医大を来年卒業されますが、もうちょっと生きていておあげになれたらと惜しい心が一ぱいです。先生も御心残りだったかもしれません。

太希志さん今度はヒマになられたのですからゆっくり句作して路郎先生にどっさり抜いてもらいなさいね。合掌。

する事をさっさと仕上げて早く逝き 阿茶
かわられるものならかわってあげたい気 阿茶

抄句志希太

はりのある暮らしが年を忘れさせ
素直さに期待はずれた四畳半
教科書にない文句だけ覚えて来
思い出は親に詫びたいことばかり
春景色水の方から暮れて行き
勘定書サービス煙草もつけてあり
裸になってもまれて来いと里の親
文句も言わず只晩んだまま帰る
走り書符号のような字がならび
道頓堀会うてはならぬ人に会い

石 小 島 中

本社九月句会

会場 以和貴荘
七日 午後六時

定刻をすぎた六時半、会場を見わたせば秋の落ち葉のような感じがした。

「五十名割るのじゃないか」

「いったいどういう現象なんだ」そんなささやきもれる川柳忌句会だ。

ドル・ショックや異常潮位など、何か腰の落ちつかないことの連続だが、川柳人がそれに巻きこまれるのはおかしい。

橋高薫風氏の柳話は、旅行好きの氏が、旅で見る風景より、詩心を養う目を生かしたいと、詩人らしい感覚で、路郎先生や、芭蕉や西行の遺した「詩」を追求する。

路郎先生に随行して、師の詩心の深さを旅の中で見出した薫風氏の目が生々としての柳話がつづいた。

生々庵主幹から入院中の川村好郎氏の病状が報告された。暑さと疲れであることにみんなホッとしたようなおももちだった。

月間賞杯は若本多志氏に輝いた。七年ぶりの快感だそうである。

(河井庸佑整理)
出席・庸佑・新之助・古方・一舟・酔々・柳志・肖二・綾女・静馬・圭井堂・多志志・

敏・文秋・儀一・花梢・重人・維久子・柳宏子・一三夫・生々庵・与呂志・秀信・形水・誓二・天笑・一二三・喜風・栗・一治・万のいさむ(八月出席) 凡吉・葵水・筑前・つき子・頂留子・雀踊子・慶之助・薫風・牧人・弥生・宣介・小松園・鬼遊・トメ子・恒明・金三・季賛・あいき・葉子。

席題「うぬぼれ」 小浜牧人選

うぬぼれてゐるネクタイの柄をより
うぬぼれのふもとなつたフェミニスト
うぬぼれへ左遷の辞令あわてさせ
うぬぼれとわかつてからのあほらさ
うぬぼれが壁の厚さをまだ知らず
うぬぼれのそのハツタリが板につく
役付といううぬぼれが調歩する
うぬぼれに 相づち打って 奢らす気
健康といううぬぼれが先に逝き
うぬぼれが結局女の業となり
うぬぼれの長髪風にもつれてる
女子大を出たうぬぼれが邪魔ならね
ヒット曲もううぬぼれのポーズなら
うぬぼれてるさかいどうやら生々
うぬぼれの野心まんまと 利用され
うぬぼれた 同士 話の ウマ が合い
うぬぼれの 恋は 冷たい 色で 燃え
ほめられてうぬぼれも 飲め 飲め
うぬぼれがあるからベレー帽のせ
うぬぼれの 鏡に自分 がうつらない
うぬぼれの頭へタバコの輪をかける
お見合いへどっちも返事待っている
うぬぼれが すぎて 標準語が 狂い

雀踊子 生々庵 多志志 庸佑 花梢 重人 葵水 維久子 生々庵 新之助 喜風 恒明 古方 儀一 柳宏子 いさむ 静馬 一三夫 重人 天笑 柳志 一治

初対面もううぬぼれを見抜かれる
うぬぼれて 三面鏡へ 笑いかけ
席題「達筆」 香川酔々選

達筆と褒められる 酔えば 書きなぐり
字に興味ないのが 素通りする 展示
アルバイト 達筆 知れて 職場 替え
達筆を はめりやなんぼでも 書きた
達筆を はめて 短冊 同 回される
遺墨展 読めない 順に 売れて 行き
達筆が 一家の 手紙 引受ける
達筆で なくとも 心 足る 便り
達筆へ 続く 署名が 小さく
達筆な だけ が 定年 惜し しまる
達筆か 知らぬ が 読めぬ 走り 書き
達筆な 賀状 返事を 書き そ びれ
俺が 俺が と 聞い て 句碑の 字が 読めず
達筆の 和尚 筆 と いる 酒が いり
達筆で 始ま っ て いる 秋の 色
達筆の 主は 親父の 古い 友
達筆な 代書に ビール 届け られ
達筆な 人とは 見えぬ 野良 仕事
達筆な 始末書 ポリス 賞めて くれ
達筆の 書状 会社を 大きく 見せ
いつも 来る 達筆の 賀状 見 当ら ず
達筆を はめて 読め ない 字を 問わ ず
達筆の 雑役を 呼ぶ の し 袋
達筆に 酔え ば 絵に なる 字に かわり
達筆に 本 当 らしく 見え る 誤 字
達筆に は なれ ぬ 親爺の 血 こ ゆい
達筆の 無心 状 困 っ て る よう には 見 えず

庸佑 柳志 凡吉 花梢 与呂志 重人 静馬 慶之助 柳志 万の 井堂 圭井堂 いさむ 重人 静馬 一舟 維久子 儀一 新之助 天笑 柳宏子 筑前 小松園

清華な分家 本家に呼び出され
雀踊子
水釜のあとうるわしく 請求書 酔々

席題「裏切り」 岡橋宣介選

つらくとも友を売るまい売られても
敏
不況下のスト 裏切りが続くなり
主井堂
裏切りを とくに 読んでいた社長
庸佑
裏切りを見て 善人 高が 知れ
小松園
さうかしれん裏切られたといわず
古方
そんなこと言うたかいなと恍けられ
静馬
裏切った心へ 虫の音が 淋し
酔々
裏切りやないと 自分に 言いきかせ
柳宏子
裏切りが ひそかに 寄越す 興信所
秀信
裏切った女の よいとこ だけ 残り
多志
骨折を添わせて やったのにもう別れ
柳志
裏切られても裏切られても裏切られ
新之助
裏切ったつもり 相手に 裏切られ
肖二
裏切られそうなくちつけして 貰い
天笑
裏切った心が 石に けつまずき
雀踊子
裏切りに あうとも 知らず 肚を 割り
重人
裏切りの 彼方に 赤い 灯が 栄え
重人
裏切って 坐って みたが 固い 椅子
重人
白叙伝も この裏切りに 触れて 貰い
古方
裏切りの 机東が 舞う 舞台 裏
天笑
裏切りの もう 忘れてる 顔で 来る
恒明
裏切りの 空白 妻が いて くれた
万の
裏切りの 媚態の ままで 押し切る 気
生々庵
素晴しい 裏切り 妻も 盗まれる
鬼遊
裏切りの 仲間 いて 役につき
与呂志
遠回りして 裏切は 戻って 来
雀踊子
ドンファン 誤算 女に 裏切られ
形水
裏切った 男 銚子を 並べてる
形水

裏切りも ビジネス 男眼をとじる
萬の
裏切った 夜の 瞳に おとこ 写らない
宣介

兼題「印相」 本多柳志選

印相に 凝って あれこれ 判を変え
旅風
印相を 言わず 銀行 貸して くれ
一栄
印相が 不況 時代へ 爪を とき
双葉
印相が 悪い と言われ 金を 蓄め
鶴声
使い古して から 印相を 気に したし
千寿子
長男として 印相が 気に入ら ず
福水
印相は ともかく 端した 金も 出来
杜的
不渡りに 押され 印相 すねて いる
つき子
印相など 関係が なし 嫌を 振る
維久子
辞める ように なって 印相 引 かり
一栄
印相も 調べ 判屋の 如く なく
庸佑
印相へ モウ 老骨は 踊らない
雀踊子
底辺に 生きて 印相 氣に ならず
筑前
めくら判 押すのに 印相 みても いら
一栄
地下足袋をはいて 印相 用事 なし
重人
不渡りの 印相 悪い 瞳で 見られ
儀一
印相まで 氣にする 程の 不倅
多志
印相が 世の 変遷を 見届ける
筑前
再起する 決意 印相を みて 貰い
多志
運勢を 変える 印とは 思われ ず
文秋
区役所は 印相 抜きで 証明し
秀信
手相家 印相 までも との わず
秀信
印相に 大臣の 名も 引出され
トメ子
印相に 凝り 大金は まだ 持て ず
天笑
印相を変えたところ ヘドル ショック
小松園
印相の 哀れ よめくら判に され
綾女
印相が 氣になり 出した 下り 坂
酔々
ご先祖の 土地を 印相 売れ と言
酔々

印相の チラシへ 効果 すぐに 来ず
金三
印相を 換えても 回わる 火の 車
維久子
印相を 凝う 程の 金を 貯め
柳志

兼題「追善」 阿万万的選

追善の 供養 仏が 若過ぎる
扇水
追善と 襲名 興行 派手にする
金三
追善の テープ 空白 がある 鳴咽
杜的
追善演奏 ずらり 故人の 好きな 曲
杜的
地蔵さん たてて 追善 事故 現場
双葉
追善で 故人の 別な 面を 聞き
日満
追善も 断られたり 問答 無用
静観堂
忘却を いましめ ながら 香を 焚く
旅風
追善を よく さいて いる 千羽 鶴
祥月
追善で なく さいて いる 千羽 鶴
野迷路
霧の 海 晴れて 花束 捧げられ
軒太楼
追善 供養 亡父も 知らぬ 端唄 出る
百水
追善へ 賄 繰 したい 顔が 寄り
鶴声
追善の 位牌が ずらり 事故 語る
富子
追善と 言うが 商魂 たくましく
富子
追善に こんな 美人の またいと
与呂志
追善を 済ませて 凡人 氣を 休め
文秋
悪友の 追善 悪友 だけが 寄り
つき子
追善の 席で おやじの 恋を 聞き
天笑
追善の つもり いやいや 跡を 継ぎ
新之助
追善と 言う名で 義理が 寄つて くる
文秋
追善の 舞台 端役で 恩返し
牧人
追善に 句集を 出して 子は 強く
敏
合同葬 生残り に マイク 向けられる
誓二
追善の 名で 売名の 寄付を する
綾女
追善へ 賞めて もらった 舞を 舞い
鬼遊
何よりも 追善 家業 忙しい
柳宏子

追善供養借金はそのまんま 多志
追善の挨拶しは嘘もあり いさむ
追善のつもりで過去の女訪う 小松園
旧悪も人間味となる追善忌 一二三
眼を閉じて粹な故人に触れる朝 小松園
追善の主は知らない人が寄り 葵水
七回忌やっと先妻へ詫びが出来 生々庵
して上げた追善酒が足りぬ席 凡吉
追善で亡夫の通りが解けはじめ つき子
追善へ系図通りの顔揃い 久司
追善で次の選挙をはじめる 恒明
追善の席に後釜らしいひと 儀一
追善興行故人生きてるこの人 警二
追善の座に補聴器も供えられ 葵水
追善に仏縁と言う人に会い 雀踊子
死んでまだ追善などとダシにされ 重人
追善へ叱られた顔皆揃い 一舟
追善の美名で二代目を狙う 一三夫
追善をすればお寺の寄付も来る 喜風
追善に特ダネ級の艶ばなし 鬼遊
追善に後妻がお布施はずませる 生々庵
追善へ古い短冊持つて来る 万的
兼題「天気図」 戸田古方選

天気図になかった雨で風邪を引き 柳志
勝ちほこる台風天気図縦断す 万的
小豆相場で天気図に強くなり 天笑
天気図を羽田に米から見まいとす 生々庵
天気図の隅で台風思案する 静馬
遭難の日の天気図を貼る日記 天笑
天気図をそうかそうかと雨男 生々庵
天気図はどうあるうとも傘を提げ 静馬
天気図が無けりや行けた空の旅 一舟
山小屋に天気図一枚落ちて居た 重信
天気図は晴ばかりなり母の旅 秀風
百点と言えぬ天気図信じとき 喜風
天気図の中でも日本小さいこと 柳宏子
天気図に照るてる坊主書いて寝る 小松園
天気図で荒れる日待つ密輸団 秀信
天気図に明日があるからあきらめる 一治
何んでもない時の天気図よく当たり 多志
台風の進路天気図は知らぬこと 葉
稚内千ミリバールへ出るあくび 天笑
生半の知識でも天気図が見たく 古方
兼題「ポイント」 大坂形水選

議論沸騰ポイントいつかそれて 葉
ポイントをずばりついで鬼にされ 一の舟
禅庭のポイントとなる砂の白 万的
ポイントを踊る扇の中に置く 一治
ポイントが大々変わるドルショック 宣介
ポイントをうまく外した記者会見 秀信
ポイントをついた話しであなどれず 敏
ポイントはこのと講師声を張り 柳宏子
ポイントのない目でピエロ今日も生 一二三
ワンポイントずれた女房で羨し 静馬
ライバルとしてポイントには触れず 天笑
ポイントがちょっと違つては離婚 千寿子
ポイントをバストに似たデザイナー 一三夫
ポイントを少しずらして名幹事 生々庵
ポイントへ来るとまあ飲たは飲たは 静馬
職人の腕ポイントを心得る 文秋
ポイントを顔からそらすイヤリング 矢名
ポイントを絞れば段々呆けてくる 花梢
昭和元禄ワンポイントが流行るなり 荳風
ワンポイント外し話の腰を折り 牧人
ポイントをもたずらされてる焦り 天笑
一の矢二の矢ポイント崩せぬとさ 生々庵
ポイントだけ教えて後は考える 多志
誤解されそうポイント伏せておく 形水
★

▼東大阪市川柳同好会一日時十月十六日午後六時開催 場所中央公民館第二集會室、近鉄永和駅前 兼題「菊人形・空・落書・腕」席題二題(当日発表、各題三句) 公費一〇〇円。

老地柳堂

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

南大阪川柳会

金井文秋報

嫉妬する心の愛をたしかめる 花 柳
愛素直無心のままの老夫婦 柳宏子
土の愛信じて夏も耐える草 好 郎
氣心を知って静かに放つとかれ 滋 雀
独り居の相手に蜂がきてくれる 古 方
土佐犬の貫録横向きもせず 圭井堂
方言のサーブスじんと胸に来る 文 秋
外出をして気がかりの多いママ 恒 明
けいそがれて地味も不安になつて来る 一 舟
妻の留守ベットの猫をけつとばす あいき
あなどった相手に女ついで行き 肖 二
愛の血を寄せて命の灯を守る 君 子
もう愛がどうのこうのと言わぬ仲 智 子
結納も済んで気がかり一つ減り 金 三
親なればこそ気がかりを口にせず 吸 江
氣がかりは主人の事より犬のこと 水 京
早耳が勘違いした話題まき 儀 一
地図迄もそえて転居の通知来る 凡九郎
美しい指でつつい 酌をうけ 葵 水

氣がかりは電話中途で切れたまま
金魚鉢 相手を求めて浮き上がり
違反した相手の方がかすり傷
これならばと攻め相手はそっぽ向き
転んだ子起こしてやらぬも愛のうち
餌付けの根野鳥も愛を信じ出し
サーブスやおまんうち本気です
きこえない耳が話題に遠くいる
愛告げる便りと知らぬ社名入り
片隅に理性追ひやる愛かなし
しくじりをコントにされた時の人
民主化をされた職場も人が来ず
前歴は問わず語らずドヤに生き
鉄を切る火花に秋が戻つてる
コントが生れる夕陽の沈む街角で
ほじくった妻の秘密をもてあます
出生の秘密人間変えさせる
年だけは秘密女傑の面白い
編集子余白へコント貯めて日
満足をしたかゴントの素直な日
再会へ火花散らした頃の事
着替えても職場の香り持ち帰る
終電の火花が幕をひいて往く
子の育ち秘密やなんて云いだした
内緒内緒と母娘で何かあるらしい
線香花火最後の火花ふりしほり
金づるにされる秘密になつちまい
毎日がコントになつて 日記帳
満ち足りた心湯ぶねの隅にいる
今火花散らせば家族養えず
先の先読んで職場の灯がくらし
形 水
一 治
新 一
好 一
静 馬
章 雅
誓 二
静 香
敏 郎
圭 井
文 秋
滋 雀
葵 水
花 子
智 子
水 京
醉 々
金 三
柳 宏
千 子
千 子
新 之
凡 九
誓 二
綾 女
恒 明
あい 子
静 歩
一 舟
古 方

ひとのよいハズへ秘密を明かし兼ね
一篇のコントのように恋終り
しのびよる秋昆虫に知らされる
眼が笑うだけで秘密に触れてこず
サラリーマンママへ秘密のない生活
満足でないが誠意はよくわかり
検査室のムード何やら秘密めく
子沢山コントも演じ朝を出す
小さい秘密もって乙女の胸豊か
家庭では職場の鬼も馬になり
地下街が職場の鬼になる軽い咳
コントにも似て夫婦げんかのまどろこし
どんぐり川柳会(大阪市) 川村好郎報
夕飯を食べて私用の秘書となる
七十の余生私用に明け暮れる
新人りへ私用の電話かかり過ぎ
うっかりと褒めたらうらやまみつめられ
湯疲れのまた湯につかる雨つづき
靴べらもいらぬゴム長妻も履き
口紅も私用の色にして出かけ
北浜へこっそりかけている電話
私用とわかつて仲居の愛想よし
ネクタイを褒めるサーブスもう古い
お世辞でも女は笑顔忘れない
靴べらも素直にすべり朝を出す
セールの私用の歩巾別に持ち
よほどいい私用が崩すスケジュー
私用もうあきらめデモの列に入る
肩書が私用にまで巾がきき
睦しく私用分け合う共稼ぎ
ほめ言葉に苦勞部長の娘さん
儀 一
一 佑
庸 三
喜 風
双 楽
君 子
一 榮
肖 二
静 馬
雅 香
静 香
鬼 遊
痴 亭
之 保
弥 生
史 好
雄 峯
醉 々
修 史
吸 江
つ 子
い わ
一 治
緑 翠
比 呂
勝 惠
八 郎

孫のこと褒めて欲しそな 口をきき 生 長
褒めすぎた バツの悪さの 咳ばらい 凡 風
ママ褒めて パパは叱って 子は育ち 喜 風
手を抜いた 造成こわい 雨つづき 双 楽
又ですかと 妻靴ベラを持って来る 草 春
ポケットの靴ベラいじっている 思案 好 郎
スチニアデス 私用の旅は 無口で居 薫 風
どんぐり川柳会(羽曳野市) 川村好郎報
手 不足と見え 云え 光 桂 馬
マツ箱と人云わば 云え マイホーム 一 步
不足など云うまい パパの背は清い 吐 来
意味もなく マツチを灯すもの 思 酔 々
辻地蔵詣る 人あり マツチ箱 宝 恵
ポケットの マツチに妻はもう妬かず 吸 江
倅せは 不足を 云わぬ 妻があり 岳 太
マツチの火つける マダムの下心 笑 兄
満足を 不足で 暮す 嫁 姑 チエノ
マツチする 心の 奥にある 善意 秀 菜
空くじのない ましな マツチ 二個 文 作
マツチ箱でもよし だんらんの 灯が 童 虎
ひとり旅 マツチを 借りてから 和 好 郎
まるべに川柳会(大阪市) 川村好郎報
ゆとりある 心微笑み にじみ 出 扇 里
笑 てる 眸に 僕も 笑 てる 立 兄
意味のある 微笑とつきに 下を向く 幸 子
夫と子に 微笑の 限りわけ 支え 寿 子
弁当を 食べば そろそろ 去に 支度 星 太
一つだけ スイッチ 忘れて 独 身 寮 風 斗
未練切る 心の スイッチ 見つからず 好 郎
八尾菜の花川柳会 飯田一治報
襖 絵の ように 芒に 月が出る 静 馬

夕暮れて 風吹き 抜ける 旅の宿 誓 二
十五夜に 裏で 芒も 月ながめ 飛 鳥
ケールカー 今来た道を 振り返る 維 久
高原の 列車 漫画の ように 乗る 金 三
高原に カラー テントの 花が 咲き 弥 栄
アンテナに 昨日の 風が まだ 残り 一 治
芒の 穂所詮 運命の 老の 坂 凡 九
月雲に 耐える 芒へ 秋の 風 儀 一
高原の 風も 味覚の うちに 入れ 花 梢
高原に 来て スモッグの 息を はき 吸 江
われながら 辛抱 強い 待合 わせ 史 好
高原の みやげ 不運な かぶと 虫 美 代
ケールを 儲けさせて 毘沙門 天 茂 雄
ケールに 蹤いて 下界の 蝶 上 がる 醉 々
高原の 冷氣 テントの 裾に 来る 笑 痴
高原の 出会い イニシャル だけの人 力
待合 わす 駅の 時計が 疑が われ 葵 水
さりげない 顔を ホテルの 灯が 染め られ 鬼 遊
二代目の 風が 吹いてる 縄の れん 静 歩
満月へ 芒を 活ける 花 鉢 雀 踊
高原の 秋は 絵になる 色で 暮れ 柳 志
迂闊にも 君子 ホテルを 彷徨えり 圭 井
浜風に ネッカチーフが よく 似合い 栗 堂
野仏の 顔は 芒に 撫で られる 小 松
川柳ささやま句会 河 原 みの 報 小 松 園
ソニーズが 命で 果した 九分 九厘 吉 裕
九分 九厘 もう 一厘と まだ 破談 緑 村
九分 九厘 上出来 亭主に いた 不足 百 合
一厘の のぞみに 近親 凝視 する 近 江
五十の 手習い 手本に 反撥し 蕪 石
良い 手本 だったと 歩んだ 過去を 追い 村 雨

お手本に なる よな 人の 少な すぎ 泰 舟
ゴッホも ピカソも 手本に ならぬ 絵 古 仙
手本を 自認する 父の 腕たし しか 刀 児
写経して 悟った ように 筆洗ひ 昌 宏
平凡な 母を 手本に する 娘 無 聖
ジョース一本 飲まれ 催促云い せ 雅 佐
ストローはいらんわいなと 汗の 顔 実 路
青空の ジュースに ストローが 要ら ず 可 住
曇天へ 明日は 旅行の 星探 ず 掬 水
病んで 見る 星美しき 気の 弱 り ゆき
黒星が 三角と なり マゲを 切り 素 水
密会を また たき ながら 見 てる 星 八 陣
おくれ ば せ 否 応の ない 座に 就 かせ みの
おくれ ば せ 見 事 会 議に 水 を さ し し げ 緒
男まさりと 聞く 手の ひらの やわら 猪 村
勝運は ての ひらで 鳴る 駒の 音 昌 宏
ての ひらが 握って しもた 袖の 下 可 住
ての ひらが 忘れぬ 釣へ 誘い 出 し 近 江
掌中に 村びと ある よな 票勘 定 広 江
ての ひらに 孫の 胎動 感じ たり 清 香
ての ひらの 筋の 深さが 家さ さえ 緑 村
髪床の 鏡世 相を 知り つく し 素 水
ガラス戸で 鏡の 役を すませ とき 橋 竹
バフ 忙 忙し 鏡の中 飛ぶ 指令 みの
今日 からは 人妻で すという 鏡 掬 水
青空へ 飛び たし 片は ねに なり し とも 雅 佐
寂 として 青い 頭が 整 列 し 村 雨
倅 せは 青葉の 中 家に 持 ち 八 陣
青大 将 さすが 大 物 動 かない 枝 葉
犬吠 崎の ごろ 寝に し みた 青 青 芳 野

楠若葉夫婦は青い風に佇ち
本殿の奥から欲をみすかれ
青白い男鋭い勘を持ち
本殿へ二人の夢をそなえとき
本殿にそなえた酒が気にかかり
本尊はわからぬままで頭下げ
てんぶらを喰たよに公約ペラペラと
てんぶらは見るうちに空になり
てんぶら屋うなぎに負けずはばき
天ぶらのいかは入れ歯を逃げ回り
夏の男にエビ天と大ジョッキ
てんぶらの腕で亭主もうまくあげ
ウイロー社(ハワイ) 明 春 報
一握り砂にアロハの温みあり
口に出ぬ言葉は堅く手を握り
一握の砂の脆さに似てさびし
口惜しさにただわなわなと握りしめ
勝名のり握り拳を高く揚げ
江戸前の手つきよろしき握り寿司
公害を笑つてような村の月
公害か今年マンゴ味わるし
五月晴公害らしき影もなし
政争の具にも公害あやつられ
名城の趾わくらばのおびたし
ネーダーの行く先みんなあわてさせ
騒ぐ程でもない公害二つ三つ
南海電鉄川柳会(大阪府) 辻 圭水報
国鉄も押されフェリーへ 大型化 儀 一
荒天の予報フェリーへ 気をませ 柳 信
フェリーで午睡ささるドライバー

地続きと錯覚させてフェリー出る
カーフェリー動く巨城とデビュ
フェリーが着けばマラソンの宇野駅
フェリー欠航新婚予定にいらてなし
フェリーボートにガイドの昼がま
○
制服のボタンを変えて個人タク
個人タクシーついでに自分の児を送り
割り込みへ個人タクシー腹立てず
個人タクシー娘の夜歩きを無事届け
古都の春 個人タクシーガイド兼ね
個人タクシー十時だけどきりあげ
個人タクシー運転歴を信じきり
水揚げはこの次という個人タク
個人タクシー家庭の味をただよせ
個人タクシー一家支える老いの顔
個人タクシー今日は家庭のマイスター
川柳わかやま 垂井葵 水報
日曜日鍵と孫とを預けられ
ステッカーガラスに張ってスト続く
愛の果の秘密も守るスリガラス
窓ガラス破って幕になる草野球
鍵を置く場所だけ妻が知っている
ダイヤかなガラスかなと凝視する
ひたむきな性がコースをひた走る
小走りに母来て友の計を知らず
競馬狂馬の補修内助の有頂天
カギ裂きの補修内助の功を見せ
パトカーが走るところで不仕合せ
女教師の鍵明けている分校舎
下手だから走り書きだと書いておく
千寿子
和 郎
金 三
誓 二
主 水
摩 天 郎
貴 山
摩 天 郎
柳 信
金 三
耕 人
主 水
誓 二
頂 留 子
宏 子
清 涼
和 郎
照 代
苞 夢
ふみよ
延 伊 知
佳 宵
みさお
一 光
峻
福 松
良 四 郎
智
久 美
千 寿 子

鍵鍵とやかましいのによく忘れ
買うほどでない立ち読みの走り読み
鍵なくしドロボー並みの苦勞する
大胆に女着がえるスリガラス
鍵たんとつけて女の城虚し
悔ひとつ胸の隅から走り抜け
お待ちになって? 灰皿チラと見る
高知川柳社(高知市) 川竹松風報
陽当りを防いでくれた落葉掃く
陽当りの悪い下宿の子を金三
陽当りがいいから裕福そうに見え
セールの事が陽当りほめて腰を据え
陽の当る仕事が欲しかる馬の足
太陽を部屋いっぱいに住む隠居
横道に車を停めて恋のお茶
横道にそれた息子をあきらめる
パチンコへ行く横道でめしを食い
横道に駐車安宅までの距離
ひねくれてから横道を歩きだし
逃げ道も作っておいてする浮気
感情に走って大事なものを捨て
妻の瞳は追加の欲しい顔と知る
祝電を打ってひとりで飲んで
栄転を羨望の眼が送りに来
無職にも用あり春の種袋
母校からきてこの度と無心状
蛙ケロケロ出稼ぎ農夫呼び戻す
川柳たけはら 森井菁居報
小心のただ企ててみたばかり
おせっかい出来る身分を賞めておく
あべこべに見て芸術がむつかしい
扇 水
采 陽
里 美
城 石
弘 生
太 茂 津
葵 水
窓 花
十 字 路
伸 子
勝 子
春 輝
蟠 蛇
芽 十
羅 春
寛 緑
桂 雨
紅 雨
竹 莊
美 知
松 風
恭 一
伊 津 志
青 果
重 雨
星 雨
操 子
李 贊
水

角砂糖あえなく崩れる意地である
 広島は広島呉は呉時間
 詩心ケシゴム丸く小さくなり
 病み上り朝の空気のうまいこと
 ほめられたスカーフ今日もしめても
 ご馳走を前に祝辞がまだつつき
 日帰りでもいいから来てと孫の文字
 金魚売る声もどかに島の春
 現場から異議あり事務の机上論
 澄んだ瞳に大人は嘘の虚をつかれ
 生活の支え心に詩を探す
 はじめての駅案内をわずらわし
 親のない月の長髪が批評され
 忙中忙五月の空を楽しまれ
 電話口なんだお前かと言われ
 文盲の母に教わること多し
 苦勞さす妻にすまないビッコ引く
 公害を知らぬ地方へ来た左遷
 頼りないようでやっぱり男の子
 子供よりママがはりきる入所式
 ファッションへ親の意見も入る見る
 矢車が緑の風を呼んで鳴り
 母さんがやっぱり来てた雨の駅
 時間よ止まれ私に春があり
 野の仏石にはあらず旅ごころ
 男ならここでタバコが吸えるのに
 こどもの日朝から食卓子供向き
 七人の敵も味方もなく孤独
 年寄りの合掌ながき善光寺
 恋というよりは可愛い感じだす
 結納を納める朝の灯に折る

のり子 木瓜 日出夫 西合 秀子 五湖 清太郎 不動 郷愁 泉 大陸 英詩 貞子 美佐雄 雅鳳 康宏 鬼焼 路秋 浄美 和子 春子 春子 かつ子 笑子 不朽 妙子 清子 春子 政己 蘭幸 房子

胸上げされて不覚にも出た涙
 芽の出ない鉢に気をもむ五月風
 妻がいない今朝もやっぱり顔洗う
 ペビー靴歩き始めて外が好き
 打ち明けてそれからお茶の美味し
 母ちゃんがいてなんと今日も過ぎ
 人間の限界夢にたくしてみ

静水 天石庵 紫苑莊 そのみ 菁居 洋子 令江

堺市千代の会

宴中ば床の方から席が空き
 下座から睨みを利かす総会屋
 席順へ座り心地の悪い酒千代
 底ぬけの阿呆と叱って泣いている
 底ぬけの阿呆の知恵をかりられる
 気まぐれの旅からの便りカネオク
 前歴を問わぬ仲間が幅きかす
 正直に前歴言うて断わられ

香橋 朱門亭 千代之助 初九 バツテラ 曾呂利 有楽 幸太郎

城北明朗会

川口弘生報

孫の言毒舌にとる淋しい日
 毒舌に政治屋ぬらりと身をかわし
 毒舌で有名な人にのし上がり
 ユーモラスな毒舌で稼ぐ漫談家
 毒舌で日本の政治にメスを浸れ
 毒舌を真にうけ今はもの言わぬ
 寝足りない分だけからむ毒舌か
 よく聴けば毒舌とても味があり
 母の日の夫エプロン掛けてくれ
 一年中胡瓜食べてる味気なき
 研究所学者の顔をすてはいいり
 我が子にもゆずれぬ財布かたくしめ

弘生 満津子 繁子 賛平 三十四 富士 進 隼人 秀村 濁水 春果 久子

新宮不老川柳会 大矢十郎報

★

気がつけばUターン出来き恋と知り
 断りは妻の電話でケリがつき
 マツチ持つ。パパは花火におよび腰
 ニクソンはでっかい花火ぶちあげる
 病む床に花火の音の腹にあげる
 花火より店屋の方が大繁昌
 花火には揃って来いと嫁の里
 飛行機米あんなの買えとせがま
 娘に買った花火に親も子も帰えり
 夫婦喧嘩電話に水を入れられる
 子の上げた花火巡査に注意され
 公約を花火のように消さないで
 花火より暗いところがよい二人

富子 岐平 白明 翠陽 暢子 英典 清定 久司 貴雄 友蔵 十郎

▼傍島静馬氏(同人)は九月二十六日、宝塚市武庫川町四番三号・宝塚第一コーポラス八一五号室へ奥さんと水いららずで移られた。
 ▼山本素郎氏(堺市同人)は漢詩に親しみながら句想を養っておられる。
 ▼藤村涼子さん(アメリカ)がベルーのリスから一町で盛況も貧弱だとのこと。
 ▼尼緑之助氏(出雲市同人)は秋の川柳行事の準備に追われている最中、路郎賞受賞の朗報を受け、感激です。
 ▼原独仙氏(出雲市同人)は十月十七日に金婚祝賀句会を開催される。
 ▼山内静水氏(竹原市同人)から、大会は一八五名の出席、七〇名の投句、小松園先生にも来ていただき感激しております。
 ▼川柳塔バジ締切迫る、多数のご応募を、

西尾 葉 著

句集『水鶏笛』

六五〇円
送料共

・残部少々・

白柳さんは生きている

『清水白柳遺句集』

定価 六〇〇円
送料 百円

・好評噴々・

川柳塔のシンボル・バッジ 図案募集！

同人諸氏のご要望にこたえ、ここにひろく川柳塔のバッジの図案を募集することになりました。

採用作には薄謝を呈します。

ふるって力作をお寄せください。

締切 十月末日

川柳塔社

十二月号 発表表 (10月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島 生々庵 選

近作柳樺 (10句) 川本 好久志 選

課題吟 (各題5句以内)

「金策」 都倉 求芽 選

「実力」 浜野 奇童 選

「逆か立ち」 黒川 紫香 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

新年号発表表 (11月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島 生々庵 選

近作柳樺 (10句) 川本 好久志 選

課題吟 (各題5句以内)

「自転車」 出原 敬一 選

「孝行」 横山 一声 選

「マナ」 西森 花村 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限りまします。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

10月3日は総会と二賞発表

定価 百八十円 (送料十六円)

半年分 千七百七十円 (送料共)
一年分 二千二百円 (送料共)

昭和四十六年九月二十五日印刷
昭和四十六年十月一日発行

大阪市南区鰯谷仲之町〇番地

編集人兼 発行人 中島 蓬太郎

印刷所 大陽印刷株式会社

郵便番号 五四二

大阪市南区鰯谷仲之町〇番地

発行所 川柳塔社

電話 大阪・二七一三九八五番
振替口座 大阪・三三三八八番

・ペンペン草・

★本年度の二賞の作品が決定した。

★ガゼン出雲はゴールド・メダリストの名門になった。

★路郎賞の尼緑の助氏と川柳塔賞の王紫さんの功績は大きい。山陰勢強し。

★そういう意味で竹原も強い。川柳塔賞作家が三宅不朽氏について生信笑子さんが脚光を浴びた。おめでとう。

★有信新之助、谷垣史好の二氏に編集部入りをしても

疲労・肩こり・神経痛に

アリナミンA

☆5ミリ錠・25ミリ錠・ほかに50ミリ錠 ☆食後にどうぞ

☆詳しくは医師や薬局・薬店でご相談ください。



タケダ

らった。

★編集部というのは緑の下の力持ちで、舞台でいえば裏方である。前記二氏にすまないと思っている。

★ボクが「川柳雑誌」の編集部に八年以上もいたことを他社の人たちは案外知らないようだ。川柳雑誌と川柳塔の編集法がよく似ている。そんなことを聞いて苦笑したことがある。

★その頃の印刷は、試験問題で注目を浴びた大阪刑務所でももらっていた。収容者はみなシロウトだからなにかにつけて仕事がしにくかった。だが、刑務所ばかりの技術競技会のような催しがあって、同所から

「孤島のような編集室で不二田先生と小谷さん、恋のカケラも持ち合わせないの知ら？」とよくいわれます。仕事には妥協をしないきびしさなど、尊敬の方が強いので恋は芽生えないらしい。性格が正反對なのに六年間も勤まったことを不思議に思っております。

(葉子)

七、八種の俳句雑誌などにまじって「川柳雑誌」も参加した。

★かなり広範囲の刑務所から出品されていたが、優勝の栄冠は「川柳雑誌」が勝ち得たのである。印刷、編集ともに抜群だとのことだった。

★収容者はよろこんでくれた。あるとき、ボクの割りつけどおりに組まなかったことがあって、ボクは例によってガナリたてたものである。そのまちがえた収容者が、別の工場へ移されるとき、もう一度、植字をやったボクにあやまりたいと担当さんに頼んだそうである。

★この話を聞いたとき、ジンとくるものがあった。よっぽど優勝したことがうれしかったようである。こんなに仁義のわかる人が、なぜ罪などを犯かしたのだろうか。

★路郎先生は、組み見本(わりつけ)に雑誌のページを原稿に添えて印刷所へわたされるが、裏面のページとまちがえぬよう、白紙で裏ばりをされていた。実を云

お買物は 4都を結ぶ 大丸へ!



大阪・東京
大丸
京都・神戸

い」と云われた。

★夢ばりに使用していたボスターに、女優の顔や、ときには裸女の乳房や下腹部の写真があったわけだ。それを収容者たちが奪い合って、えらい騒ぎがあったそう。

★このような単純な人ばかりなら、試験問題は起きなかったかも知れない。

★もう一つ、つけ加えておこう。出張校正で八年間に何百人かの収容者に会ったが、ボクほど人相の悪い人は一人もいなかった。

(不二田一三夫)

★ある日、担当の主任から「あの裏ばりはやめてほしい」と云われた。

美の殿堂 大和文華館

平城京をめぐる山々を一望の
 静かな環境にある大和文華館
 は 日本建築の特色に近代美
 を生かした美術の殿堂です
 収蔵品も日本・中国を中心に
 国宝・重要文化財を含む 有
 数のコレクションです
 観覧時間…10時～17時

▶近鉄奈良線 学園前駅すぐ

近鉄



豚饅・焼売・焼餃子



大阪・なんば

TEL (641) 0551~2

出張販売店

なんば高島屋/虹のまち鹿鳴/心斎橋そごう/梅田阪神/天満橋松坂屋
 京阪デパート/堂島地下センター/弁天阜頭支店/中之島サン・ストアー